HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	純農村部に立地する小規模農業高校・学科の存立意義 ： 北海道別海高等学校定時制課程酪農科の農業後継者を育てる教育実践から
Author(s)	髙野, 正
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 98, 193-235
Issue Date	2006-06-30
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.98.193
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/14438
Type	departmental bulletin paper
File Information	98_193-235.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究科
紀 要　第 98 号　2006 年 6 月

純農村部に立地する
小規模農業高校・学科の存立意義

── 北海道別海高等学校定時制課程酪農科の農業後継者を育てる教育実践から ──

髙　野　　正*

Significance of Existence of a Small Agricultural High School/Subject Located in a "Pure" Farming Village Part: From The Educational Practice to Cultivate and Train Future Farmers, in Daily Farming Subject, Part-time Schooling Course, Betsukai High School in Hokkaido

Tadashi TAKANO

【要旨】本研究は，現在，高校再編が急速に進行しつつあるなか，農業高校の再編問題に関わって，北海道における農業高校・農業学科の１つの事例研究，具体的には，別海高校酪農科の教育実践とその展開を事例として，今日の農業高校教育の「揺らぎ」の根本原因ともなっている「農業後継者の教育」を，その地域的な教育課題に位置づけるとともに，そこへ地元の子ども・青年の実態を重ね合わせながら，農業高校・農業学科の地域社会に果たす役割，すなわち，純農村部に立地する小規模農業高校・学科の存立意義について検討したものである。

その結果，純農村部に立地する小規模農業高校・学科にとっての存立意義は，第１に，地域の子ども・青年・保護者（住民）の実態に即した「地域の高校」として存在し，第２に，農村地域社会に対して，どのような役割を果たすことができるのかということを強く自覚することであり，第３に，その役割としての「農業後継者の教育」が，地域農業の実際と結び付いて，豊かに，実践・展開されていかなければならないという３点を結論として導いた。

【キーワード】高校再編，小規模農業高校･学科，純農村部，農業後継者，定時制課程酪農科

Ⅰ．研究の目的と方法

１．問題意識と分析視角

現在，「生徒数の減少」を根拠として，高校再編[注1)]が急速に進められている。このうち，全国的な高校再編の動向をみると，再編計画には，農業高校･農業学科[注2)]がその俎上に載せられる

* 北海道大学大学院教育学研究科教育計画講座修士課程（教育行政学研究グループ）平成 17 年度修了。現･北海道士幌高等学校教諭

場合が多い[注3)]。その主な理由としては，入学者の恒常的な定員割れ，学校農場や施設設備の維持管理費等における教育財政面の脆弱化，さらには，農業高校教育そのものの「揺らぎ」を指摘することができよう。

今日までの農業高校は，時代の進展による産業・就業構造の変化に絶えず翻弄され，いつの時代においても農業高校教育の在り方に対して，常に厳しい変革が求められてきたといってよい。それは，1961（昭和 36）年に制定された農業基本法を契機に，戦後日本の農業が大きく変容していくなかで，農業高校もまたその不可分な関係性から，その数を大きく減らしていくと同時に，その教育の質的転換をも迫られ，農業高校のレーゾンデートルそのものが厳しく問われてきたということである[注4)]。この事実は，「動揺する」農業高校をめぐっての，「農業後継者の教育」に対して突き付けられた鋭い争点の１つとして理解することができよう。

すなわち，その争点とは，農業高校の目的・機能において，一方には，農業後継者の養成を目的に掲げた人材育成としての伝統的な農業教育論が，他方には，戦後の民主教育運動を中心とした生徒の人間発達・人格形成が強調された普遍的教育論が対置された，両者の二項対立的な構図として展開されてきたものである[注5)]。

このうち，後者の立場から浜田陽太郎は，「（農業自営者養成高校[注6)]に対して ── 引用者注）いったい，農業高校は，職業訓練機関なのか，後期中等教育機関の一環としての人間教育機関なのか」[注7)]という疑問を呈し，さらに，「農業後継者の教育」に関して川俣茂は，「高校教育における農業教育は，あくまでも農業の基礎教育と人間教育に重点をおき，職業としての農業の実践教育は，農政の行う農民研修教育施設の研修教育に任せることが本筋であり，有効である」[注8)]（傍点引用者）としている。

一方，これとは別に，行政当局からの報告として，1991（平成３）年，総務庁行政監察局が公表した『産業教育の現状と問題点』によれば，農業高校･農業学科に対して，「全般的にみて，学んだ職業教育に関する知識，技術とは関係の少ない分野へ就職する者の割合が高く，しかも，農業，園芸，畜産の自営者養成学科についてみると非農家の子弟が多く，就農率は極めて低い」[注9)]（傍点引用者）という監察結果が述べられており，とりわけ農業後継者の養成に関して否定的な評価が下されている。

このように，これまでの農業高校における「農業後継者の教育」に対しては，多くの疑問や批判が提起されてきた。つまり，先にも指摘した「農業高校教育そのものの『揺らぎ』」とは，これらの疑問や批判に象徴される「農業高校の不振」の一端を表すものであり，また，その根本的な原因についてみれば，それらの疑問や批判において，そのまま語られているように，農業高校教育に対する「農業後継者の教育」の位置づけのされ方にあるといってもよい。それはまた，高校再編が急速に進められている現在，農業高校・農業学科がその対象とされていることに対しても決して無関係ではないのである。

しかしながら，田島重雄[注10)]や赤司政雄[注11)]が明らかにしてきように，かつての農業高校は，「農業後継者の教育」によって，その存立基盤ともなっていた農村地域社会の成長･発展に寄与してきたという事実がある。また，小出達夫[注12)]や横井敏郎[注13)]は，北海道の町立農業高校を対象として，そこから，地域の側が農業高校を地域づくり計画のなかに位置づけ，地域づくりの核ともいえる「人づくり」の一環に高校を組み込むとともに，高校の側は地域づくりを担う人材の育成を積極的に追求することで，農村地域社会の発展と農業高校の再生に成功した事例を報告している。

さらに翻って，最近の新規学卒就農者数の動向をみても，その数は全国で毎年２千人を辛うじて満たす程度の状況が続いているが[注14]，そのなかに，農業高校を卒業して直ちに就農する者も含まれているという事実は決して無視されるべきではない。

したがって，現在の農業高校の果たすべき役割の１つとして，改めて，「農業後継者の教育」を正当に評価するとともに，それを農業高校教育のなかに正しく位置づけるということは，農業高校とその教育を再考するためにも極めて意義のあることであろう。それと同時に，この問い直しは，現在の農業高校をめぐる再編問題を検討していく上でも，決して見落とされてはならない重要な課題であると考える。なぜならば，近年，再び「地域と教育」「地域と学校」の相互関係が問題とされる傾向にあるからである。

このことに関して，かつて，中野哲二が昭和末期の鹿児島県における農業高校再編の経験から指摘した，「小規模で地域と密着した農業後継者教育を実施していても，その地域が過疎状況を起こしそうになっていても，また，高齢者だけの農村になろうとしていても，そのような地域の事情等は無視して高校の統廃合は進められたとしか言いようがない。農業高校の配置もこのような地域の農業・農村を正しく位置づけて行うべきであり，また簡単に大型農業高校のみを残すことがよいとも言い難い」[注15]（傍点引用者）という問題提起は重く受け止められる必要があるだろう。

そこで，この問いに切り込む焦点の１つは，〝農業後継者〟という意味内容をどのように捉えるかという分析視角にある。つまり，〝農業後継者〟といった場合に必要な分析視角について吟味すれば，「従来，農家世帯の後継者（主に男性を意味する）が新規就農するということは，『家業としての農業後継者』と同時に『いえのあとつぎ』であることを意味していた。そのことは，地域農業・地域社会という面でいえば，地域農業の後継者，数世代にわたる定住民の後継者，そして，営農・生活を通じた地域資源維持保全の後継者であることも意味していた。したがって，新規就農青年の不足は，地域社会・地域農業の後継者の不足を意味する大きな問題」[注16]（傍点引用者）になるという指摘は注目しておく必要がある。すなわち，本研究で設定したい〝農業後継者〟を捉える分析視角とは，農業経営および「いえ」の後継者という側面を含みつつも，そのような個別・限定的な意味だけに止まるものではなく，それ以上に，「地域社会の維持・形成者」というように，その地域社会全体の担い手として巨視的に捉える視点である。

さらに，農業高校・農業学科の存立という側面からいえば，農業高校は，本来の高校教育が果たす教育的な役割とは別に，自らが立地している地域社会に対して，優れて大きな役割を果たしている場合がある。その役割とは，他の普通科高校などよりもより具体化された，その地域社会の「形成・維持・発展」のためのもの，すなわち，その地域の子ども・青年に対する「地域を担う人材育成」が目指された教育として考えられるものである。そして，この教育課題は，とりわけ若者の流出に悩み，過疎化が深刻になりつつある地方の農村部において，そのまま切実な地域課題にも結び付いているといえよう。このことは，一般的に，都市部に近い比較的規模の大きな農業高校よりも，むしろ，地方の農村部に立地している小規模農業高校・学科にこそ当てはまる教育課題なのである。

さて，本研究で取り上げる別海町は，北海道東部の根室管内に位置し，都市部からも遠く離れ，産業構造においても農業（酪農）に大きく依存した，いわゆる「純農村」の町である。したがって，このような地域において，その地域農業の担い手である農業後継者の育成は，重要な「課題」にもなっているといえよう。また，この町に唯一存立する北海道別海高等学校（以

下，別海高校と記す）は，現在，定時制課程酪農科（以下，酪農科と記す）１学級と全日制課程普通科（以下，普通科と記す）３学級の学科編制となっているが，このうち，酪農科の教育機能は，別海町という地域を存立基盤にしていることから，依然として「地元の農業後継者の育成」を主軸に実践・展開されている。

そこで，このような学科が仮に廃（閉）科されてしまえば，間接的には，地域基幹産業の基盤を掘り崩す契機にもなろうことと，直接的には，家業の酪農を後継する生徒たちに専門的な教育を施し授けることも，農業後継（就農）という進路選択を励ますこともできず，専門的な農業教育の「場」を経由することなく，卒後就農を強いさせてしまう懸念が生じてくると考えられる。

一方，このことに関して，別海高校を含めた当該地域の高校再編をめぐっての議論では，具体的に「どの高校のどの学科」が学級減になるのかは審議の途中であるが，別海高校においても酪農科と普通科とを合わせた学級数の維持，とりわけ酪農科の廃（閉）科も視野に入れた議論が別海町内の関係者・機関の間で行われている。そのなかで，仮に，酪農科が廃（閉）科になった場合，「地元の農業後継者の育成」について，これからの農業後継者の教育は，別海高校酪農科のみに固執せず，同校内に併設されている普通科から大学等の上級学校へ進学して，さらに高度な専門教育を受けてから家業としての酪農を後継すれば良いのではないかという意見も出されている。

しかしながら，このような意見に対して，別海高校酪農科に学ぶ農業後継（就農）を予定している生徒のなかには，自家の労働力として，経済的な理由，学力の問題等の様々な困難から上級学校への進学が制限されている実態もみられるのである。また，将来，酪農を後継しようとする同じ目標や夢を持った者同士が集い，影響し合う「潜在的カリキュラム」に拠った農業後継者としての仲間・ネットワークづくりは，専門（職業）教育の効果の上で見過ごしてはならない大切な観点でもある。

以上のことから，本研究の目的は，別海高校酪農科の存続問題を課題の背景の１つとしつつ，そこでの教育実践と展開において，今日の農業高校教育の「揺らぎ」の根本原因ともなっている「農業後継者の教育」を，改めて，その地域的な教育課題に位置づけるとともに，そこへ地元の子ども・青年の実態を重ね合わせながら，農業高校・農業学科の地域社会に果たす役割，すなわち，純農村部に立地する小規模農業高校・学科の存立意義を明らかにしていくことである。

２．接近方法

本研究の方法として，その主要な取り組みを述べれば，①今日まで別海高校酪農科は定時制１学級として存続し，これまでに別海町を担う農業後継者を数多く輩出してきた実績と実践がある。このことに対する地元関係者の認識や評価はどのようなものか，②地元の子どもたちが成長し，将来，家業の酪農を後継するに至るまでには，別海高校酪農科の生徒において，どのような意識を持って農業後継（就農）に至っているのか，③その過程において，別海高校酪農科はどのような位置づけができ，その存立基盤となっている地域社会（別海町）に対してどのような役割を果たしてきたのかということをそれぞれ明かにすることである。

そこで，接近方法としては，上記の課題に対して，①については「インタビュー調査」を，②については「アンケート調査」を主として実施し，それらの結果から総合考察として③を検

討していくというものである。以下では，それらの調査に関する概要について示す。

はじめに，インタビュー調査は，いずれも 2005（平成 17）年に実施し，その概要は次の通りである。

2 月 20 日	・元別海高校酪農科教諭	三宮幸夫氏（在職 26 年，農業，平成 6 年退職）
2 月 21 日	・JA べつかい代表理事組合長	丹羽忠文氏（別海高校教育振興会長他）
	・別海町役場産業振興部農政課長	大屋利和氏（農政関係は 5 年目）
2 月 22 日	・別海高校酪農科教頭	米田敏也氏（在職 2 年，農業，現・静内農業）
	・　〃　教諭	漆原　剛氏（在職 9 年，農業，教務部長）
	・　〃　教諭	鈴木　薫氏（在職 17 年，保体，生徒指導部長）
3 月 14 日	・元別海町教育長	葛西　祐氏（教育長は 8 年間）
	・酪農科保護者	2 家族（平成 15，平成 16 年度卒業生）
3 月 16 日	・別海町長	佐野力三氏（別海高校 OB・第 1 期生）
	・別海町教育長	山口長伸氏（元小学校長）
3 月 17 日	・別海高校酪農科･専攻科 OB	安部政博氏（同窓会長，別海町議，酪農家）
	・酪農科保護者	1 家族（平成 15 年度卒業生）
3 月 18 日	・別海町議	渡辺政吉氏（文教厚生常任委員長，酪農家）
	・酪農科保護者	1 家族（平成 16 年度卒業生）

次に，アンケート調査は，2005（平成 17）年 9 月に，大区分として，「別海高校酪農科関係」と「別海町内中学校関係」を対象にそれぞれ実施した。すなわち，それらを小区分として示せば，前者を，①現在，別海高校酪農科に在籍する全生徒，②農業後継を予定している生徒の全保護者，③別海高校酪農科を平成 13～16 年度に卒業した農業後継（就農予定）者の 3 区分に，後者を，④別海町内の全中学生，⑤中学生の全保護者の 2 区分に実施した（表 1）。そして，アンケートの回収率は，小区分ごとに，① 97.4%，② 53.1%，③ 72.9%，④ 96.4%，⑤ 60.1% であった。

最後に，本稿の研究題目にも掲げている「純農村部」の定義について述べておきたい。

農政調査委員会の『農業統計用語事典』[注17] によれば，そのなかで，「農村地域」「山村」「大都市近郊農業地帯・中間農業地帯・遠隔農業地帯」等に関する定義は確認できるが，「純農村」という定義は存在しなかった。また，2004（平成 16）年 3 月 15 日に開催された食料・農業・農村

表 1　アンケートの回収状況

調査の対象		配布数（人）	回収数（人）	回収率（%）
大　区　分	小　区　分			
別海高校酪農科関係	①在籍生徒	116	113	97.4
	（うち，ホームプロジェクト生徒）	(28)	(28)	(100.0)
	②農業後継予定生徒の保護者	32	17	53.1
	③農業後継の卒業生	48	35	72.9
別海町内中学校関係	④中学生	559	539	96.4
	⑤中学生の保護者	504	303	60.1

資料出所：筆者の調査結果から作成した。

政策審議会第 11 回施策部会の議事録のなかでも，農村振興局計画部長が委員からの農村の定義に関する質問に対して，「正直，農村の定義はないのが現実でございます。……中略……見た感じが何となく農村ならば農村と。正直，今後とも，農業的土地利用が中心なところは当然農村であろうと考えておりますが，明確に定義したものがないのが実態でございます」[注18)] と回答していることからも判断して，「純農村」という用語･概念は，現時点において，厳密に定義されていないように思われる。

したがって，本研究においては，先にも述べたが，「純農村」部を「都市部からも遠く離れ，産業構造においても農業に大きく依存した地域」と，ひとまず定義しておきたい。つまり，「純農村部」とは，俗な表現を借りれば，「農業以外で生きていくには困難な地域」ということを想定している。本研究では，小規模農業高校・学科の立地に関して，それだけ，都市部や都市近郊ではなく，地方の農村（部）ということを強調しているのである。

II．別海高校酪農科の存続問題

現在，別海高校は，定時制課程酪農科 1 学級と全日制課程普通科 3 学級の合計 4 学級を有する全・定，普通科・農業学科の併置，総合校として，北海道東部の根室管内別海町に，町内では唯一存立する高校である。この他に，高校教育を修了した農業自営者に対する教育機関として，農業特別専攻科[注19)] 1 学級が併設されている。

別海高校酪農科は，1950（昭和 25）年に，もともと中標津高校西別分校として創設された高校であるが，これまでに，「地元の農業後継者の育成」を主軸に展開されてきた，そのユニークな教育実践は，各方面からも高い評価が与えられてきた。例えば，最近のものに限ってみても，新聞・雑誌等において取り上げられた内容を紹介すると，以下の通りである。

> 後継者育成看板に　家庭実習を重視，先生役は親（がんばれ農高② ── 元気校を行く）── 別海高校（北海道）
>
> ……ここに全国でも有数の就農率を誇る〝農業高校〟がある。……中略……同科では今年度の卒業生三十七人中十八人が，就農を志す。入学時の就農希望生徒は十人ほど。三年を経てクラスの半数が牧場経営に夢を語るようになった。……／……ホームプロジェクトは同校の特徴的な教育プログラムの 1 つ。牧草刈りなどで忙しい五～十月の登校は，週三日間だけ。残り二日間は家の仕事を手伝いながら，自家農場の経営改善を目指した研究テーマに取り組む。十二月に生徒がそれぞれの研究成果を発表する。／同校には，牛も畜舎もトラクターもない。家庭での実習を重視し，親が先生役を務める。……／後継者不足は町でも深刻な問題だ。二〇〇二年までの過去十年間に離農した酪農家は二百二十戸。理由の三割を後継者不足が占める。新規就農者を入れても，毎年十五戸ほどが離農する計算だ。／町農政課の大屋利和課長は言う。「昔は負債で離農する人が多かったが，今は後継者不足が深刻だ。これだけの若者が酪農を継いでくれるんだから，高校への期待は大きい」── 日本農業新聞，2004（平成 16 年） 2 月 7 日，(1)から

> はばたく酪農未来人　ユニークな教育で後継者を育てる ── 別海町
>
> ……この，まさに酪農のまちで，未来を切り拓く後継者育成に全力を注いでいるのが

> 道立別海高校酪農科だ。／斉藤さん（前段で紹介されている卒業生 ── 引用者注）のような後継者を育成するために別海高校酪農科では，昼間定時制というユニークな教育を展開している。……中略……今年卒業した三十七人のうち約半数の十八人が後継者としての道を選び，十二人は 2 年制の農業特別専攻科へ進学した。「我が校では二つの科による五年とういスパンで未来の酪農家を育てます。家の仕事や経営という現実を教材とするカリキュラムと優れた教員の力によって，酪農について具体的に学び，夢を輝かせることができる」（当時の教頭だった米田敏也氏のコメント ── 引用者注）からこそ，斉藤さんのように真剣に酪農家を目指す若者が巣立っているのだろう。── 北海道農政部農業企画室，『confa』，2004 年冬号（12 月号）VOL.20，5-6 頁から

このように，１学級＝最小規模の農業（学科）高校であることに加えて，とりわけ注目されるのは，創設時以来の定時制課程（昼間）という，むしろ，現在の農業高校にとっては〝マイナス〟条件とされている，農場や牛舎等の施設・設備が無いことを逆に活かして，地域酪農を担う後継者の教育が実践・展開されてきたことである。それはまた，地元の別海町にとっても大きな意義を持つものであった。

ところが，近年の「生徒数の減少」と，「職業教育の改善」が企図された専門高校･専門学科の再編が進行している現在，「別海高校酪農科の存続問題」は，別海高校はもとより，地元の別海町においても大きくクローズ･アップされている。特に，「生徒数の減少」は，別海町においても例外ではなく，別海町教育委員会によれば，別海町内の中学校を卒業する生徒数は，2005（平成 17）年の 224 人が二百人台の最後となり，それ以降は百人台後半で推移し，2013（平成 25）年の 157 人が生徒数の，いわゆる〝底〟となる見通しを立てている。したがって，別海高校ならびに別海町は，「別海高校酪農科の存続問題」を含めた，「生徒数の確保」に向けた「学校の将来構想」の明確化を早急に図る必要に迫られている。そのため，別海町当局は，「北海道別海高等学校教育振興会」（以下，「振興会」と記す）を設立させ（平成 15 年 11 月 25 日），これらの問題を協議するとともに，その対応に当たっている。

この活動によって，現時点で得られている結論は，「普通科 3 間口（学級数の意 ── 引用者注）は死守したい。そして，酪農科については，地域の基幹産業であり，産業の担い手を育てる，次世代の人材を育てるという期待や価値は高いというなかで，どうしても，たとえ，その定員を割る状況が続こうとも，存続する特段の配慮を頂きたい」[注20] というものであった。つまり，現状の 4 学級を何とか維持したいという考えである。

そして，この「結論」に基づいて，2005（平成 17）年 2 月 9 日に，別海町長･佐野力三氏，別海町教育長･葛西祐氏（当時），JA べつかい代表理事組合長･丹羽忠文氏（「振興会」会長），別海町文教厚生常任委員長・渡辺政吉氏（「振興会」副会長）らは，「北海道別海高等学校の適正間口堅持に関する要請書」を北海道教育委員会へ提出するとともに，現状の「４学級維持」とする陳情を行なっている。

現在，北海道根室学区には，旧第１学区に根室高校（普４，商２）・根室西高校（普３）が，旧第２学区に別海高校（普３，定酪１）・中標津高校（普４，商１，事務情報１）・町立中標津農業（農２）・標津高校（普２）・羅臼高校（普２）のそれぞれが存立する。このうち，別海高校が位置する旧第２学区では，「平成 17 年度公立高等学校適正配置計画地区別検討協議会資料」によれば，2005（平成 17）～2007（平成 19）年の「３年間で１～２間口の減が必要」とされて

いる。すでに，2006（平成 18）年度の公立高等学校適正配置計画の決定がなされ，旧第 2 学区内は学級減とならずに済んだが，しかし，続く 2007（平成 19）年度以降に，「1 ～ 2 間口程度の減」も十分予想される。さらに，これまでの専門高校・専門学科の適正配置に加えて，定時制課程の在り方[注21)]も見直しが始められているという[注22)]。

以上のことから，根室管内全体においても，どのような再編計画が決定されるのかは予断を許さない状況であるが，別海高校ならびに別海町にとっては，酪農科･普通科の学級数の維持，とりわけ酪農科の廃（閉）科に関する存続問題が厳しく問われていることが理解されよう[注23)]。

Ⅲ．別海町の特質と地域課題

別海町は人口 16,786 人（2005 年 3 月 31 日）で，北海道東部の根室管内中央部に位置し，いわゆる根釧原野とよばれる平原の一画として，東西 61.4 km，南北 44.3 km に広がる，総面積 1,320.15 km² という広大な土地を擁している地域である（このうち，耕地面積は 63,500 ha を占め全国第 1 位の規模を誇っている）。その立地は，北に標津町および中標津町，南に根室市，西に釧路支庁の標茶町および厚岸町と接し，東にオホーツク海と面しながら国後島を望み，日本のほぼ最東端という場所にある。

別海町の産業の概要は，2000（平成 12）年の就業構造人口をみると，第一・二・三次産業の順にそれぞれ，3,709 人，1,517 人，4,081 人となっており，第一次産業従事者の割合が全体の 39.9％を占めている。このうち，農業従事者は，就業構造人口で 3,120 人，同総人口に対する割合で 33.5％を占めており，各業種別のなかで最も多くなっている。しかし，1990（平成 2）・1995（平成 7）年のそれと比較すると，第二・三次産業の人口は増加傾向がみられるものの，第一次産業は離農者の増加から減少傾向となっている。

一方，2002（平成 14）年の産業別生産（出荷）額およびその割合では，農業，漁業，工業，商業の順にそれぞれ，433 億円の 30.8％，75 億円の 5.5％，592 億円の 43.1％，283 億円の 20.6％となっており，工業の生産額が最も多くなっている。しかし，その内訳は，町内で稼働している 3 つの乳業工場によるものがほとんどで，言い換えれば，その売上げの実質は酪農によるものとなる。

そこで，別海町の酪農の概要についてみると，2002（平成 14）年では，農家戸数 1,040 戸（専業 1,030 戸，第 1 種 139 戸，第 2 種 13 戸），農家人口 3,709 人，乳用牛頭数 119,100 頭，肉用牛頭数 11,500 頭，生乳生産量 462,000 t，生乳販売額 349 億円，肉畜販売額 74 億円，農業粗生産額 423 億 3,300 万円となっている。これらを全国のそれと比較すれば，乳用牛飼養戸数，乳用牛飼養頭数，生乳生産量および農業粗生産額のいずれもが全国第 1 位の実績である。

このように，別海町の酪農は，今日までに飛躍的な発展を遂げてきた。しかし，その過程においては，別海酪農の発展の推進力となったものとして，これまでの農民･農業者個々による，たゆみない営農努力があったことも勿論であるが，その努力とともに，この地域の開発には，官民をあげた，とりわけ国の農政を中心として展開されてきたという事実がある。

最初に，その飛躍的な発展の端緒となったものは，1 つには，「根釧パイロットファーム事業」であり，2 つには，根釧パイロットファームの確定に伴った，酪農振興法（酪農及び肉用牛生産の振興に関する法律）による「高度集約酪農地域」の指定であった。

前者は，1955（昭和 30）年 10 月に，世界銀行の融資をベースとして計画が決定されたもので，

いわゆる試験的農業を大規模な機械開墾によって行い，モデル的な酪農経営を短期間のうちに実現しようとした事業である。この根釧パイロットファームの誕生は，建設後の営農推進に対して，多くの問題点が提起されたのもまた事実であるが，それらの評価とは別に，「この実現は，そののちの根釧原野の酪農のあり方をまったく一変して，今日の近代化の礎をつくった」[注24)]とされるように，別海地域における「酪農近代化」への先鞭をつける成果を生み出した。

他方，後者における酪農振興法は，1954（昭和 29）年 6 月 14 日に制定され，「酪農の合理的な発展の条件を整備するための集約酪農地域の制度および生乳等の取引の公正をはかるための措置を定めることによって，酪農振興の基盤を確立し，もって酪農の急速な普及発達および農業経営の安定に資する」[注25)]ことを目的とされたものである。その後，同法による第 2 次指定として，1956（昭和 31）年 9 月 17 日に，別海町（当時別海村）は，中標津町，標津町（当時標津村）とともに「高度集約酪農地域」の指定を受けることになった。

このようにして，昭和 30 年代に入り，別海町の農業，すなわち酪農は，国家主導のパイロットファーム事業の展開ならびに高度集約酪農地域の指定といった強力な梃子入れによって，「酪農近代化」への道が開かれていったのである。

さらに，これらに加えて「酪農近代化」を決定的なものとし，今日の別海町における基幹産業としての地位を確立させたといえるのが，1973（昭和 48）年から着工が開始された「根室地域広域農業開発総合事業」，通称「新酪農村建設事業」であった[注26)]。この「新酪農村建設事業」は，1969（昭和 44）年に新全国総合開発計画（新全総）における「大規模畜産基地建設構想」の大規模開発プロジェクトに基づき策定され，根室地域に大規模で高能率な畜産経営体を創出し，システム化・装置化された一大畜産基地を建設しようとするものであった。

その結果，各種の基盤整備と効率的な機械化による経営の近代化が着実に展開され，大型・近代化された酪農経営体が次々と誕生した。その〝姿〟はまさしく，今日の別海町における基幹産業としての地位が確立されたという事実はもとより，全国一の経営規模と生産性を備えた〝酪農の郷〟が形成されていった軌跡でもあったのである。

しかしながら，その発展の成果を〝光〟とするならば，もう一方には，今日までに繰り返されてきた「離農」という〝影〟の現実があることを見逃してはならない。その離農問題は，昭和 40 年代に入ると，経済の高度成長を背景に，日本農業の在り方に対して，全国的にも深刻な問題となった，いわゆる「農業後継者難」によるものであった。この「農業後継者難」という問題は，別海町においても顕在化し，それまでの主たる離農原因であった，営農不振における「負債問題」と併存しながら徐々に固定化されていった。それと同時に，この問題は，地域の形成・維持・発展のためにも，町全体の「地域課題」として意識され始めていったのである。

そこで，別海町における 1966（昭和 41）年以降の農家戸数の推移をみると，現在に至るまで，一貫して減少し続けていることがわかる（図 1 ）。実際には，1966（昭和 41）年の農家戸数が 2,068 戸であったのに対して，2004（平成 16）年のそれは 962 戸となっており，この間の減少総数は 1,106 戸を数え，減少率では 53.5％に至り，実に農家 2 戸のうち 1 戸が離農した計算になる。さらに，今後の北海道における農家戸数等をシミュレートした北海道立農業試験場資料「農業統計を用いた北海道農業・農村の現状分析と将来予測」[注27)]によれば，別海町の酪農家戸数は，2010 年「846 戸」，2015 年「741 戸」に減少することが予測値として示されている。もしも，この予測値が現実のものになるならば，単純にみても，町人口の減少につながる他，何よりも，農業生産活動の衰退によって波及する様々な経済的･社会的な側面への縮小傾向が必至になる，

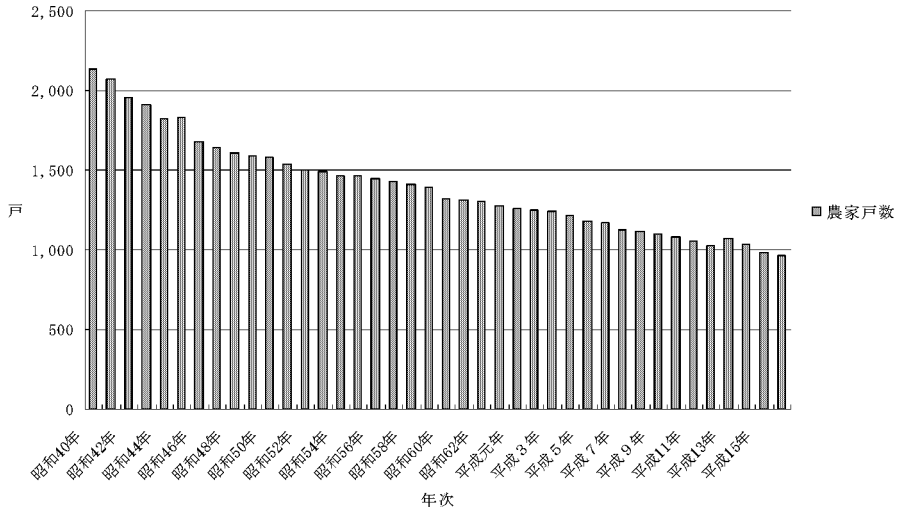

図１　別海町における農家戸数の推移（1966 年～2004 年）

資料出所：別海町役場産業振興部農政課調べ。

表２　近年の根室管内における離農原因

（戸，％）

区分（平成）			6 年	7 年	8 年	9 年	10 年	11 年	12 年	13 年	14 年	15 年
根室		離農農家	29	13	27	15	26	27	25	33	26	21
	割合	高齢化･後継者問題	24.1	53.8	44.4	60.0	42.3	48.1	48.0	39.4	26.9	38.1
		将来不安	6.9	15.4	3.7	0.0	3.8	11.1	8.0	33.3	7.7	0.0
		負債問題	62.1	30.8	33.3	33.3	30.8	29.6	36.0	9.1	11.5	33.3
		労働力不足	6.9	0.0	18.5	6.7	23.1	11.1	8.0	18.2	53.9	28.6
全道		離農農家	1,125	1,186	1,338	1,265	1,072	1,075	1,134	1,049	982	900
	割合	高齢化･後継者問題	43.6	46.9	45.4	48.1	45.4	45.3	44.0	47.1	45.9	50.8
		将来不安	8.4	7.7	10.1	7.0	7.8	8.7	8.7	8.0	5.8	5.5
		負債問題	14.6	16.7	14.4	14.1	19.5	15.3	16.7	14.8	17.5	14.0
		労働力不足	33.5	28.8	30.0	30.8	27.2	30.7	30.6	30.1	30.8	29.7

資料出所：北海道農政部農地調整課，根室支庁農務課調べ。

ということが想像されよう。

したがって，農業を基幹産業とする地域においては，とりわけ別海町のような全国一の経営規模と生産性を誇る地域は，それゆえに，「離農問題」が地域の「死活問題」へと容易に転化してしまう可能性が常に潜在しているともいえる。

ここで，改めて，近年の根室管内における離農原因についてみると，1994（平成６）年までは「負債問題」が 62.1％を占め，他の原因を大きく上回り離農原因の第１位になっていた（表２）。ところが，翌 1995（平成７）年には，「高齢化･後継者問題」が 53.8％を占めるようになり，「負債問題」に代わって，「高齢化・後継者問題」が離農原因の第１位になっていることがわかる。それ以降，離農原因に対する「高齢化・後継者問題」の占める割合は 40～50％前後で推移し，2002（平成 14）年を除けば，常に離農原因の第一に挙げられて現在に至っている。

以上のように，別海町は，町の基幹産業として成長が開始された昭和 40 年代から，「農業後

継者難」が顕在化するとともに，さらに，その問題が固定化されていくなかにおいて，地域農業を担う人材の育成をどのように実現していけばよいのかが，町の重要な「地域課題」の１つになった。その過程は，町全体において「地域課題」が自覚されるとともに，それが共有されていく姿でもあったのである。

その地域課題は，今日に至っても変わらずに存在し続けており，とりわけ町内の農家戸数が千戸を割った現在においては，町の存立基盤にも影響を与えかねないほどの深刻な問題となっている。このことは，酪農が町の基幹産業であると同時に，その酪農に大きく依存した独特の産業構造を有しているがゆえに，より一層切実な「地域課題」として捉えることができるのである。

Ⅳ．別海高校酪農科の創設と展開

１．別海高校酪農科の創設とその社会的な背景

別海高校の前身である西別高校は，1950（昭和 25）年に，中標津高校の分校として創立され，その後，分離独立した。そもそも別海高校の出発は，酪農科ではなく，普通科（夜間定時制課程）からであった。すなわち，別海高校酪農科は，学校の誕生から 14 年を経た 1964（昭和 39）年に，普通科からの学科転換によって創設されたのである。

西別高校の当初の目的は，地元商店の従業員を教育しようとするものであったという[注28)]。また，創設されてからの数年間は，毎年 50 名前後の入学者があっても卒業するのは 10 人前後という状態であったともいわれている[注29)]。実際に，学科転換が行われて閉科となるまでの 14 年間の卒業生数は，わずかに 162 名（年平均 11.6 名）を数えるに過ぎなかった[注30)]。その理由には，当時の西別市街（現別海町の中心地）における戸数が約 600 戸ほどであったこと，さらに，村全体の道路・交通事情も劣悪な状況であったことなどがあげられる[注31)]。したがって，当時の西別高校は，夜間定時制課程普通科という学科編制では，なかなか生徒を集めることができず，それはまた，そのままの体制では，学校の存続も困難とされたのである[注32)]。

一方，当時の別海町における社会的な背景をみると，すでに述べた通り，「根釧パイロットファーム事業」の展開と「高度集約酪農地域」の指定による，いわゆる「酪農近代化」が強力に推進されるとともに，他方では，農業基本法の制定に伴う構造改善事業の開始，農地の基盤整備の進行など，一連の国家的な農業施策の梃子入れによって，別海町が日本一の酪農基地を目指して前進している時でもあったのである。

このように，西別高校が抱えていた，「夜間定時制課程普通科という学科編制では，なかなか生徒を集めることができなかった」という学校事情と，当時の別海町における社会的な背景とが一致した。とりわけ後者に関しては，その学科転換の目的が，「別海町の主産業である酪農経営の近代化を進め，経営規模の拡大，高度な技術の開発，農民の生活文化向上を目標に，健全で有為な酪農経営後継者と酪農婦人の育成」[注33)]とされていたことからも明らかなように，「地域農業を担い，地域の発展に寄与できる人材育成」は，当時，酪農の進展をみていた別海町にとって，地域の教育要求にもきわめて合致したものとなったのである。

そのために町当局は，「昭和 37 年度から年次計画で，46 年度までに総工事費１億 7,600 万円を投じて，校舎・屋内体育館・特別実験室・寄宿舎など一連の教育施設を整備した」[注34)]という。このような，当時の町当局がとった行動は，それだけ，地域の基幹産業に発展しつつあった酪

農を是が非でも〝守り抜く〟といった酪農関係者をはじめ，地域住民・農民が持っていた強い意志の具体化でもあったといえよう。

以上のように，別海高校（当時西別高校）の学科転換，すなわち，酪農科の創設は，別海町の地域住民・農民にとっての切実な教育要求から生まれてきたといっても決して過言ではないだろう。それはまた，その後に顕在化してくる「農業後継者難」という困難な問題と相俟って，別海高校酪農科の教育的な意義はますます大きなものとなっていったのである。そして，そこでの教育実践は，現在，農家戸数が千戸を割った別海町にとって，別海高校酪農科によせられた「地域農業の担い手の育成」という強い期待が込められているともいえよう。つまり，このことこそが，今日的な意義に照らした農業高校における「農業後継者の教育」によってなされるべき「地域社会に果たす役割」の１つに他ならないのである。

２．別海高校酪農科が地域社会に果たした役割 ── 農業後継者輩出の実績から

別海高校の一大転機となった酪農科への「学科転換」は，当時，酪農が地域の基幹産業に発展しつつあった別海町にとってもまた，大きな意義を持つものであった。それは，昭和 40 年代からの「農業後継者難」という新たな問題が顕在化してきたからである。そこで，この問題は，地域農業を担う人材の育成をどのように実現していけばよいのかということが町の重要な「地域課題」にもなった。また，この「地域課題」は，地域の形成・維持・発展のためにも，町全体のそれとして〝自覚〟されるとともに，さらには，町全体で〝共有〟されていったのである。

それでは，酪農科が創設されたことによって，地域農業を担う人材としての農業後継者の育成は，どの程度果たされていったのであろうか。以下では，この点について，農業後継者輩出の実績という側面から検討してみたい。

酪農科へ学科転換される前，すなわち，西別高校時代における普通科の最後の卒業生（昭和 41 年度）に関する卒業時の状況は，「昭和四十一年は卒業生二十一人で村内にとどまった十一人のうち四人が酪農に従事」[注35)]したとされている。つまり，この時の就農率は 19.0％に過ぎなかった。これに対して，翌 1967（昭和 42）年度以降，すなわち，新たに創設された酪農科の卒業生に関する卒業時の状況は，「四十二年（卒業生四十人）は村内にとどまった二十七人のうち十四人が，四十三年（同四十五人）は三十人のうち二十人が，そして四十四年（同四十二人）は二十八人のうち二十二人が，それぞれ酪農に従事」[注36)]したとされており，それらの就農率はそれぞれ順に，35.0％，44.4％，52.4％と着実に増加傾向を示すとともに，このことから，卒業生の多くが地域農業の担い手となっていったことがわかる。したがって，学科転換の最大の目的とされた，「地域農業を担い，地域の発展に寄与できる人材育成」は，見事に果たされていったとみてよいだろう。

ここで，改めて，酪農科が創設されてからの農業後継者輩出の実績，つまり，卒業時における就農率の推移をみると，酪農科が創設された後の昭和 40 年代後半から昭和 50 年代にかけては，常に 60～70％という極めて高い値が維持されており，年度によっては，80％にも達している（昭和 51・52 年度）（表３）。したがって，酪農科の創設から昭和 50 年代末頃までの卒業生のほとんどは，地域農業の担い手として，別海高校酪農科を巣立っていたことが確認できる。

このことに関して，別海町長・佐野力三氏は，以下のように述べている。

別海町は全国でも有数の酪農地帯です。まあ，日本一と言って良いでしょう。しかし，

表 3　別海高校酪農科における農業後継者輩出の実績

期別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
卒業年度	S 42	S 43	S 44	S 45	S 46	S 47	S 48	S 49	S 50	S 51
後継者数（人）	14	20	22	20	22	25	21	38	14	28
就農率（%）	35.0	44.4	52.4	71.4	66.7	64.1	60.0	79.2	63.6	80.0

期別	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
卒業年度	S 52	S 53	S 54	S 55	S 56	S 57	S 58	S 59	S 60	S 61
後継者数（人）	28	24	26	25	23	22	19	13	7	3
就農率（%）	80.0	72.7	76.5	75.8	62.2	53.7	54.3	50.0	70.0	17.6

期別	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
卒業年度	S 62	S 63	H 1	H 2	H 3	H 4	H 5	H 6	H 7	H 8
後継者数（人）	5	7	9	21	10	4	11	14	10	8
就農率（%）	41.2	46.7	36.0	30.4	23.8	10.5	30.6	34.1	27.8	20.0

期別	31	32	33	34	35	36	37	38	合計（人）
卒業年度	H 9	H 10	H 11	H 12	H 13	H 14	H 15	H 16	平均（%）
後継者数（人）	11	5	12	7	7	12	17	12	596（15.7 人/年）
就農率（%）	26.8	13.9	30.8	19.4	21.9	29.3	45.9	30.0	46.0

資料出所：S 42－S 44 年までは，別海町百年史編さん委員会『別海町百年史』，別海町，1978 年，787 頁から，S 45－S 53 年までは，北海道別海高等学校創立三十周年記念協賛会編集部，『別高三十年史』，北海道別海高等学校創立三十周年記念協賛会，1980 年，154 頁から，S 54－H 4 年までは，学校要覧各年度版から，H 5－H 16 までは，学校要覧各年度版をもとに進路指導部資料から作成した。
注 1）H 2 年（第 24 期）は，修業年限の改正によって酪農科 3 年生と 4 年生が同時に卒業している。
注 2）H 5 年以降の後継者数および就農率は，それぞれ後継予定者数および就農可能率として示している。

ここまでくるのにたいした苦労をしてきました。別海町の基幹産業は酪農と漁業ですが，そのうち，酪農の後継者は 8 割が別海高校の卒業生だと思います。ということは，別海酪農の担い手はほとんどが別海高校の卒業生が担っているといえます。その点で私は高く評価しています。── 2005（平成 17）年 3 月 16 日のインタビュー調査から

総じて，酪農科の創設から 2004（平成 16）年度までの 38 年間で，別海高校酪農科が輩出してきた農業後継者の総数は 596（年平均 15.7）人を数え，平均就農率は 46.0%となっている。これは，別海高校酪農科が送り出した卒業生の 5 人のうち 2 人以上の割で，地域農業の担い手になっていった事実を示している。このうち，一定程度の卒業生はすでに離農したり，また，近年ではかつての卒業生の子息が入学し，親子二代が卒業生となっている場合もあるので，単純な比較はできないが，現在の別海町における酪農専業農家戸数が 940 戸であることを考えるならば，この実績だけをみても，別海酪農の「人的基盤」を支えてきたことは明らかであろう。

このことに関して，JA べつかい代表理事組合長・丹羽忠文氏は，以下のような見解を述べている。

今ですね，うちの組合員の中の卒業生を見てみますと，酪農科を卒業した生徒が組合員になっているのと，あるいは，その子どもたちが後継者になっているというのが大半なんです，別海農協の中では。ですからもう，別海農協は，別海高校の酪農科を卒業した生徒が運営の主体になっているといっても過言でないくらい大きな，別海高校は力を発揮して頂いたと。そういう思いでいます。── 2005（平成 17）年 2 月 21 日のインタ

ビュー調査から。

一方，近年（平成5～16年度の12年間）の別海高校酪農科における就農可能率をみると，その値は26.9%（最大45.9%，最小11.1%）となっている。これは，かつての酪農科からすれば，低い値に止まっているといわざるを得ない。しかしながら，ここで，根室管内と全道におけるそれぞれの後継者補充率を比較すると，根室管内のそれは，常に全道平均を上回っていることがわかる（図2）。このことは，全道的にも根室管内において，多くの新規就農者が確保されていることを意味している。このうち，さらに，根室管内における市町別の新規就農者数をみると，別海町がその半数以上（45人，57.7%）を占めているとともに，その内訳においては，「新規学卒者」の数が最も多いことがわかる（表4）。

このことから，別海高校酪農科は，かつての就農率に比べて低下はしているものの，現在においてもなお，地域農業の担い手としての農業後継者を一定程度の割で送り出していることが推測される。それはまた，毎年20戸を超える農家が離農している現実と考え合わせるならば，「地域農業の担い手の育成」という今日的な意義に照らした上でも，別海高校酪農科が地域社会に果たしてきた役割は，極めて大きいといわなければならないだろう。

他方，別海高校酪農科における就農可能率と北海道内の農業高校におけるそれとを比較すると，後者における平均は13.2%（最大14.9%，最小11.2%）となっており，依然として，別海高校酪農科の方が高い就農率を維持していることがわかる（図3）。さらに，このことに関連し

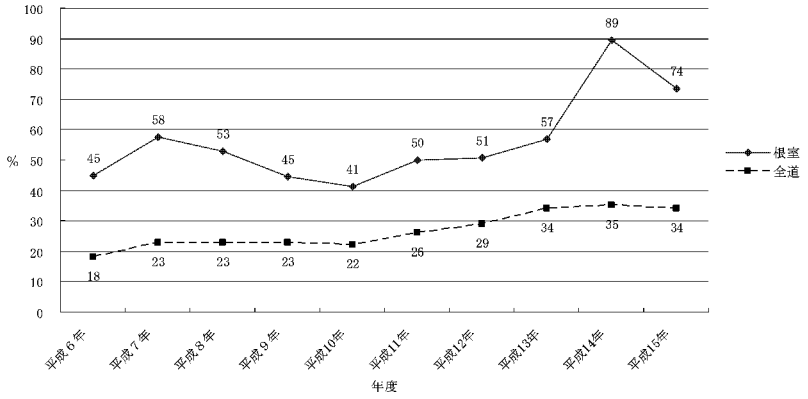

図2　根室管内と全道における後継者補充率の推移

資料出所：根室支庁農務課調べ。

表4　根室管内における市町別の新規就農者数

（人）

区　分	根室市		別海町		中標津町		標津町		羅臼町		合計
	H15	H16	H15	H16	H15	H16	H15	H16	H15	H16	
新規学卒	2	－	13	13	6	6	3	3	－	－	46
Uターン	－	－	5	9	6	1	1	1	－	－	23
新規参入	－	1	3	2	3	－	－	－	－	－	9
小　計	2	1	21	24	15	7	4	4	－	－	78
合　計	3（3.8%）		45（57.7%）		22（28.2%）		8（10.3%）		0（0.0%）		

資料出所：根室支庁農務課調べ。

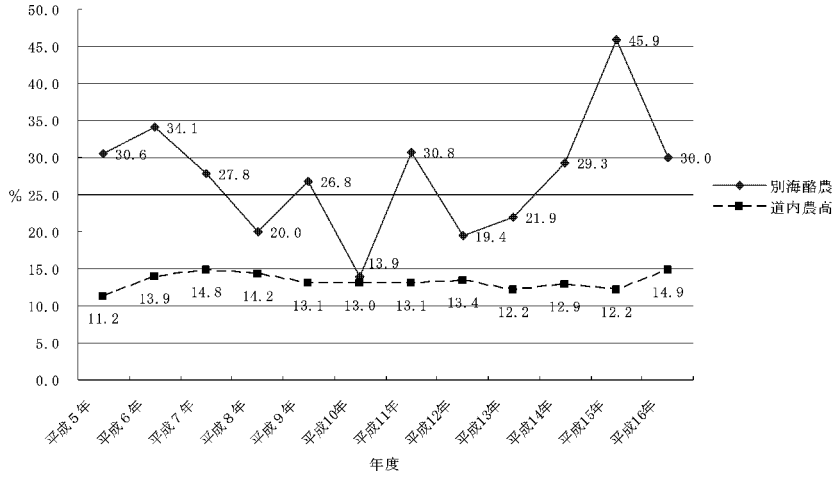

図 3　別海高校酪農科と北海道内の農業高校における就農可能率の推移

資料出所：北海道内の農業高校における就農可能率は，北海道高等学校長協会農業部会「本道農業教育の活性化のために ── 退職校長各位の農業教育論に学ぶ ──」，北海道総合農学研究会，『北海道農業教育研究』，53(1)，2005 年，93 頁から作成した。

て，注目すべきことは，別海高校酪農科教務部長･漆原剛教諭が述べる「(農業後継者が学んでいる生徒数について ── 引用者注）文科省の指定を受けた，他の自営者養成校のような大きな農業高校[注37)]では，生徒を全道から集めてくるんですが，それでも決して多くはないんですけれども，ウチ（別海高校酪農科 ── 引用者注）の場合は，別海町から集めてこの人数なので（平成 16 年度の 3 年生のうち農業後継を予定している生徒 11 名を指して ── 引用者注)，そういう意味では，本校の持ってる意義は非常に大きい」[注38)] という点である。したがって，別海高校酪農科は，たとえ農業高校としては 1 学級の小規模校ではあっても，地元の別海町という「地域に根ざした」農業高校であると同時に，道内でも屈指の「農業後継者を輩出している農業高校」の 1 校に数えることができるのである。

ここまで，別海高校酪農科が輩出してきた，地域農業の担い手としての農業後継者に関する実績についてみてきたが，今日までの別海高校酪農科が別海町に果たしてきた役割とともに，今後の意義も含めて，元別海町教育委員会教育長・葛西祐氏は，以下のように述べている。

> 「酪農の町･別海」ということなものですから，主産業である酪農が継続していかないと，別海町はまいってしまう訳です。したがって，酪農の後継者をきちっと，ある程度のスパンで育てて，養成していかないと，酪農そのものが存続しません。町の経済ということから考えても，酪農の後継者をいかに育てるかということが大きな課題として，ずっと昔からなっておりまして，今の，酪農科 1 間口と，農業特別専攻科があるんですけれども，まさしく町の産業，酪農の後継者の育成というなかで，大きな役割を果たしてきたと，今もその役割は変わっていないと思っています。── 2005（平成 17）年 3 月 14 日のインタビュー調査から。

以上のように，他の多くの農業高校・農業学科が，かつての「農業後継者の教育」を放棄せざるを得なかったことに対して，別海高校酪農科がこれだけ多くの農業後継者を輩出し，高い

就農率を維持し得たのも，その社会的な背景には，別海町という町自体に酪農生産に対する盤石な基盤があったからに他ならない。しかしながら，これを逆にいえば，この北海道東部の根室管内・別海町は，その気候の厳しさや土地条件の劣悪さゆえに[注39]，酪農しか営むことができず，かつて，産業として芽生えつつあった酪農を是が非でも守り抜き，この地域の基幹産業として育んでいこうとする姿勢を町全体が共有してきたからともいえる。このことは，別海町の形成・維持・発展にとって，今日まで切実な「地域課題」として在り続け，その「地域課題」に立ち向かうために創設され，存立してきたのが別海高校酪農科であり，そこで実践・展開されてきた「農業後継者の教育」なのである。

ここでは，北海道東部の酪農専業地域の町に唯一存立する１学級の小規模農業高校が地域社会に果たした役割について，地域基幹産業の担い手である農業後継者輩出の実績という側面からみてきた。以前から，農業高校の「農業後継者の教育」に対しては，多くの疑問や批判が提起されてきたのは事実である。しかし，このような別海町の事例を検討してみると，これまでの疑問や批判には当たらない，地域社会を支えていくための必要不可欠な教育実践を改めて確認することができるとともに，農業高校の再編問題に対しても極めて示唆的であるといえよう。

３．別海高校酪農科における「農業後継者の教育」── ホームプロジェクト

別海高校酪農科において，最も特徴的な学習方法であり，外部からも「ユニークな学習」と評されているのが，自家牧場（農場）をその「教場」として実施される「ホームプロジェクト学習」[注40]（以下，単にホームプロジェクトと記す）である。

現在，別海高校酪農科で実施されているホームプロジェクトは，実施期間が５月から 10 月までの約５ヶ月間（但し，夏期休業期間を除く）となっており，その期間における週の月・金曜日が，いわゆる「ホームプロジェクトの日」に充てられている。つまり，学校への登校は，週５日のうち３日間だけであり，この点が「昼間季節定時制課程」の大きな特徴とされる。このうち，学校行事などによって実施されない（できない）日もあるので，それを除けば，実際の実施日（回）数は，年間で約 25 日（回）程度となっている。

ホームプロジェクトの選択は，生徒の希望によって決定され，２年次から３年次にかけて継続して実施される[注41]。最近のホームプロジェクトを選択する生徒数は，2001（平成 13）年度 16 人，2002（平成 14）年度 21 人，2003（平成 15）年度 11 人，2004（平成 16）年度 14 人，2005（平成 17）年度 14 人となっており，それら生徒のほぼ全員が将来，自家牧場に就農を希望している農業後継者である。したがって，この選択している生徒数をみても，農業後継者にとっての専門的な学習の場は，何らかの形で「担保」される必要があるといえる。

この「ホームプロジェクトの日」は，学校への登校はなく，代わって，事前（４月）に設定した個々の課題（テーマ）に関する調査，あるいは，実際にその目的に応じた実験や実習を行うことになっている。さらには，自家牧場において，牧場作業に従事したり，その手伝いという体験を通して，酪農経営に必要な技術を習得するということも大きな目標とされている。

一方，ホームプロジェクトの指導方法についてみると，端的に述べれば，農業教科の教員２名がそれぞれ，地区別および設定された課題等を基準にして担当生徒を決定し，「ホームプロジェクトの日」の月・金曜日に，個別に生徒宅（牧場）を訪問して「巡回指導」を行うというものである。この際，生徒が設定した課題に対する指導・助言や援助もさることながら，農業経営者でもある保護者との連携・コミュニケーションも大事な「巡回指導」の１つとなってい

る。

このことに関して，別海高校酪農科に農業教師として26年間にわたって勤務した三宮幸夫氏は，以下のように述べている。

> ホームプロジェクトの良さというのは，大きく分けて2つあるような気がするんですよ。1つは，まず，経営者になるための基本。計画を立てて実行して，そして，それを反省して，また次に活かすっていうのは基本中の基本だと思う。農家でなくても。家計だってそうだと思います。
>
> もう1つは，言うならば，生徒指導に大きな役割を果たす。その生徒指導は，やっぱり，巡回をすることによって父兄を知る，先生も父兄に知ってもらう，そして，地域を知るということ。ホームプロジェクトっていうのは，すごくそれを助けてくれてると思うのです。── 2005（平成17）年2月20日のインタビュー調査から。

つまり，このことは，理想的なホームプロジェクトは，ただ単に生徒と教師という二者の関係によって行われるものではなく，そこに，農業経営者でもある保護者が加わった，いわば「三位一体」の営みとして実践されなければならない，ということを表している。さらに，農業後継者の育成は，学校教育のみで達成されるものではなく，家庭やその地域社会の参加があって初めて達成されるものである。その意味において，ホームプロジェクトは，学校と地域社会を「結ぶ」上でも優れた学習法であるといえよう。

また，別海高校酪農科のホームプロジェクトに関する全体的な指導目標は，「調査･実践を通して，自ら課題を理解する能力を養成し，地域農業の発展に役立てる」[注42)]（傍点引用者）とされている。このうち，特徴的なことは，実際の酪農経営に即して，「部門」ごとにそれぞれの指導目標が策定されているということである。すなわち，それらを示せば，以下の通りである[注43)]。

経営部門「わが家の酪農経営を通して問題点の発見に努め，解決しようとする態度を養成する」

乳牛部門「①乳牛の飼養管理の基礎的技術の養成を図り経営改善に役立てる（仔牛の育成）。②乳生産の把握に努め，個体能力および牛群の質の向上を図る（牛群能力の向上，乳質改善）」

草地部門「①良質粗飼料の確保と栄養価について直面する問題を自主的に解決し，実践できる態度の養成に努める。②土壌分析を通して草地の改良に努めるとともに，酪農経営の安定を図る。③体験を通して，栽培および作業などの正しい技術を理解する」

したがって，これらの「部門」ごとの学習に関する到達目標は，経営部門，乳牛部門，草地部門の順にそれぞれ，「わが家の実態を把握する」「仔牛の飼養環境を整え，良い牛づくりをする。個体能力の向上と牛群の資質向上に努める」「草地土壌を改良し，酪農生産基盤を確立する」ということになり，わが家の牧場（農場）を「教場」「教材」として，実際の酪農経営に即した学習が行われている点は注目されてよいだろう。

ここで，ホームプロジェクトを選択している生徒および卒業生の評価をみると，「搾乳や牧草

収穫など作業の手助け」「教科書では学べない実践的な学習」は相対的に高く評価されていることがわかる（表5および表6）。これに対して，やや低い評価となっているが，「規模や収支など経営内容の理解」「経営や技術的な問題点の改善」である。しかし，そのほとんどは「ある程度役に立っている（役だった）」の範囲内にある。総じて，全体的な評価を概観しても，否定的な回答はごく僅かにみられるだけで，そのほとんどが「十分役立っている（役だった）」「ある程度役に立っている（役だった）」となっている。これらは，在籍生徒および卒業生ともに同様の傾向を示している。したがって，ほとんどの生徒は，ホームプロジェクトを高く評価しているとみてよいだろう。

このような生徒の評価に加えて，指導する側の教師においても，ホームプロジェクトは高く評価されている。すなわち，教師が実感として持っているホームプロジェクトの意義についてみると，以下のようである。

表5　選択生徒のホームプロジェクトに対する評価　（上段：人，下段%）

項　　目	十分役立っている	ある程度役だっている	あまり役立っていない	全く役立っていない	合計
規模や収支など経営内容の理解	9 32.1	16 57.1	2 7.1	1 3.6	28 100.0
搾乳や牧草収穫など技術の習得	14 50.0	11 39.3	3 10.7	—	28 100.0
経営や技術的な問題点の発見	12 42.9	11 39.3	5 17.9	—	28 100.0
経営や技術的な問題点の改善	9 32.1	14 50.0	5 17.9	—	28 100.0
搾乳や牧草収穫など作業の手助け	15 53.6	11 39.3	2 7.1	—	28 100.0
教科書では学べない実践的な学習	16 57.1	10 35.7	2 7.1	—	28 100.0

資料出所：筆者の調査結果から作成した。

表6　卒業生のホームプロジェクトに対する評価　（上段：人，下段%）

項　　目	十分役立った	ある程度役だった	あまり役立たなかった	全く役立たなかった	合計
規模や収支など経営内容の理解	13 37.1	20 57.1	2 5.1	—	35 100.0
搾乳や牧草収穫など技術の習得	17 48.6	17 48.6	1 2.9	—	35 100.0
経営や技術的な問題点の発見	16 45.7	16 45.7	2 5.7	1 2.9	35 100.0
経営や技術的な問題点の改善	15 42.9	13 37.1	6 17.1	1 2.9	35 100.0
搾乳や牧草収穫など作業の手助け	19 54.3	13 37.1	3 8.6	—	35 100.0
教科書では学べない実践的な学習	19 54.3	13 37.1	2 5.7	1 2.9	35 100.0

資料出所：筆者の調査結果から作成した。

一番大きいのは，経営状態の把握をするということで，牛乳の値段とか，牛の値段を知らなかった子が，そこで把握できますし，「わが家はどのくらい所得があるのだろう」というのが，そこで分かるので，ある種，「もしかしたらこんなことしたら儲けられるんじゃないかな」っていうのもそのなかで出てきますよね。とにかく，家の中をきちんと把握できるっていうのがホームプロジェクトで一番大きいような気がします。

他の農業高校でやるプロジェクトでいえば，経営実態や実際のお金に関することはほとんどできない。だから，お金を度外視した，こんなビタミン剤やったら牛の乳量が上がるとか，そんなプロジェクトしかやらないんですけど。ホームプロジェクトの良いところは，それを，経営の中に入れて考えられるので，農業や酪農を総合的に考えられるところ，「生きた学習」ができることだと思うんです。── 2005（平成 17）年 2 月 22 日，漆原剛氏（別海高校酪農科教諭）のインタビュー調査から。

このホームプロジェクトは，それがほとんどの農業高校・農業学科において実施されなくなった現在，農業高校の果たすべき役割の１つとして，改めて，「農業後継者の教育」の意義が問い直されるならば，逆に，「旧くて新しい」学習方法として注目されるべきものであろう。それと同時に，このような別海高校酪農科にみられる教育実践・展開は，農業高校教育に対する「農業後継者の教育」を正しく位置づけるための契機にもなると考えられるのである。

Ⅴ．別海高校酪農科および別海町内中学校における生徒・卒業生・保護者のアンケート分析

１．「農業後継者」の別海高校酪農科への進学と卒業後の進路選択

別海高校酪農科の生徒のうち，「家が農家の人は，将来，家業（酪農）を後継しますか。あるいは，家が農家でない人でも，将来，酪農（または農業）をやりたいと思いますか」（以下，「後継・就農の気持ち」と記す）の問いに対して，「はい」（以下，「後継・就農希望生徒」と記す）「いいえ」「まだわからない」は，それぞれ順に，30.0％（34 人），50.4％（57 人），19.5％（22 人）となっている。また，「酪農科への進学に対する希望の程度」と農家・非農家に分けた「後継・就農の気持ち」との関係をみると，「積極的に希望していた」は，農家出身の「後継・就農希望生徒」（32 名。以下，「後継予定生徒」と記す）の 81.3％（26 人）が他のどの生徒層よりも最も多くなっている。さらに，「酪農科へ進学した理由〈A〉」と農家・非農家に分けた「後継・就農の気持ち」との関係をみると，「後継予定生徒」は，「家業（酪農）を継ぐための専門的な勉強ができるから」の 84.7％（27 人）が顕著に多く（表７），他方，「酪農科へ進学した理由〈B〉」では，「家の手伝いをしながら学べるから」の 71.9％（23 人）が顕著に多くなっている（表８）。

以上のことから，「後継予定生徒」にとっての酪農科への進学は，「自分の成績」に規定されている面もあるかもしれないが，それ以上に，酪農科を希望した理由として，「農業後継者として当然」という意識が強く作用していることが推察されるとともに，さらには，「家の手伝い」という自家牧場（農場）の運営面をも考慮に入れて，酪農科への進学を決定しているという〝姿〟が浮かび上がってくる。

これに対して，「後継予定生徒」の保護者（以下，単に「保護者」と記す）の回答結果をみると，子どもを「酪農科へ進学させた理由〈A〉」では，「家業（酪農）を継ぐための専門的な勉

表 7 「酪農科へ進学した理由〈A〉」×「家の職業」×「後継・就農の気持ち」

上段：人，下段：%			酪農科へ進学した理由〈A〉												
			合計	家業（酪農）を継ぐための専門的な勉強ができるから	酪農や農業の勉強に興味があったから	実習や実技が好きだから	酪農（農業）関連産業の就職に有利だから	一般の就職に有利だから	大学などの進学に有利だから	部活動の実績があるから	農ク（農業クラブ）活動が盛んだから	酪農科の先生方はよく面倒を見てくれるから	自分の成績に合っているから	ただ何となく	なし
家の職業×後継・就農の気持ち	合計		113	30	33	53	10	19	6	15	4	12	53	14	3
			100.0	26.5	29.2	46.9	8.8	16.8	5.3	13.3	3.5	10.6	46.9	12.4	2.7
	農家	小計	69	30	21	34	6	7	4	10	3	4	31	11	1
			100.0	43.5	30.4	49.3	8.7	10.1	5.8	14.5	4.3	5.8	44.9	15.9	1.4
		はい	32	27	12	12	5	—	2	4	3	1	10	3	—
			100.0	84.4	37.5	37.5	15.6		6.3	12.5	9.4	3.1	31.3	9.4	
		いいえ	23	—	5	15	1	6	1	4	—	3	17	5	1
			100.0		21.7	65.2	4.3	26.1	4.3	17.4		13.0	73.9	21.7	4.3
		まだわからない	14	3	4	7	—	1	1	2	—	—	4	3	—
			100.0	21.4	28.6	50.0		7.1	7.1	14.3			28.6	21.4	
	非農家	小計	44	—	12	19	4	12	2	5	1	8	22	3	2
			100.0		27.3	43.2	9.1	27.3	4.5	11.4	2.3	18.2	50.0	6.8	4.5
		はい	2	—	1	—	—	—	—	—	—	1	2	—	—
			100.0		50.0							50.0	100.0		
		いいえ	34	—	8	16	3	10	2	4	1	6	17	3	2
			100.0		23.5	47.1	8.8	29.4	5.9	11.8	2.9	17.6	50.0	8.8	5.9
		まだわからない	8	—	3	3	1	2	—	1	—	1	3	—	—
			100.0		37.5	37.5	12.5	25.0		12.5		12.5	37.5		

資料出所：筆者の調査結果から作成した。

強ができるから」の 88.2%（15 人）が最も多く，他方，子どもを「酪農科へ進学させた理由〈B〉」では，「家の手伝いをしながら学べるから」の 82.4%（14 人）が顕著に多くなっている。この傾向は子ども，つまり，「後継予定生徒」の場合と同じである。

以上のことから，「保護者」の多くは，「家業を継ぐため」と「家の手伝い」ということを，子どもを酪農科に進学させた理由として，最も重視していると考えられる。

したがって，これらの「後継予定生徒」と「保護者」の意識から，別海町という地域において，農業後継者のための「専門的な学習」と「働きながら学べる」という 2 つの要素を兼ね備えている酪農科の意義は，極めて大きいといえよう。

続いて，現在，酪農科に在籍している生徒のうち，「後継予定生徒」は 32 名であるが，この 32 名の「卒業後の希望進路」についてみると，回答の多いものの順に，「進学してから自営」の 78.1%（25 人），「他産業へ就職してから自営」の 9.4%（3 人），「即自営」の 6.3%（2 人），「未定」の 6.3%（2 名）となっており，「後継予定生徒」のほとんどが「進学してから自営」を希望していることがわかる。このうち，「進学してから自営」を希望する 25 名の「希望進学先」をみると，回答の多いものの順に，「別海高校専攻科」の 72.0%（18 人），「農業大学校」の 16.0%（4 人），「専門・専修学校」の 8.0%（2 名），「4 年制大学」の 4.0%（1 名）となっており，

表 8　「酪農科へ進学した理由〈B〉」×「家の職業」×「後継・就農の気持ち」

上段：人，下段：%			酪農科へ進学した理由〈B〉													
			合計	家の手伝いをしながら学べるから	通学に便利だから	通学費や学費が安いから	酪農の高校としての伝統があるから	学校の雰囲気がよいから	施設・設備がよいから	制服の印象がよいから	友達が行くから	先輩がいるから	親が卒業生だから	その他	なし
家の職業×後継・就農の気持ち	合　計		113	33	44	37	14	40	19	3	16	4	7	6	6
			100.0	29.2	38.9	32.7	12.4	35.4	16.8	2.7	14.2	3.5	6.2	5.3	5.3
	農家	小　計	69	33	22	26	11	20	13	1	7	3	5	3	3
			100.0	47.8	31.9	37.7	15.9	29.0	18.8	1.4	10.1	4.3	7.2	4.3	4.3
		はい	32	23	9	11	8	6	6	1	2	1	3	—	2
			100.0	71.9	28.1	34.4	25.0	18.8	18.8	3.1	6.3	3.1	9.4		6.3
		いいえ	23	2	10	9	1	11	6	—	4	1	2	2	1
			100.0	8.7	43.5	39.1	4.3	47.8	26.1		17.4	4.3	8.7	8.7	4.3
		まだわからない	14	8	3	6	2	3	1	—	1	1	—	1	—
			100.0	57.1	21.4	42.9	14.3	21.4	7.1		7.1	7.1		7.1	
	非農家	小　計	44	—	22	11	3	20	6	2	9	1	2	3	3
			100.0		50.0	25.0	6.9	45.5	13.6	4.5	20.5	2.3	4.5	6.8	6.8
		はい	2	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	—
			100.0					50.0						50.0	
		いいえ	34	—	19	7	2	15	6	2	7	1	2	1	3
			100.0		55.9	20.6	5.9	44.1	17.6	5.9	20.9	2.9	5.9	2.9	8.8
		まだわからない	8	—	3	4	1	4	—	—	2	—	—	1	—
			100.0		37.5	50.0	12.5	50.0			25.0			12.5	

資料出所：筆者の調査結果から作成した。

そのほとんどが「別海高校専攻科」を希望していることがわかる（表 9）。

しかし，「進学先を選んだ理由」と「希望進学先」との関係をみると，「家の手伝いをしながら学べるから」は，「別海高校専攻科」だけにみられる理由となっている。つまり，「別海高校専攻科」に進学を希望する生徒は，「家の手伝いをしなければならない」という進学に対する制限要因を持っていると考えられる。同様に，「家の経済的な負担を考えて」は，「農業大学校」でわずかにみられるだけで（2 名），あとの全て（7 名）は「別海高校専攻科」にみられる理由となっている（このことに関して，「農業大学校」については，「4 年制大学・短大に進学するには，『家の経済的な負担がある』ので農業大学校に進学する」という見方も可能であろう）。したがって，「別海高校専攻科」に進学を希望している生徒のなかには，「家の手伝い」と「家の経済的な負担」という進学に対する 2 つの制限要因を合わせ持っていることが推測される。

これに対して，子どもに「進学してから就農」を希望する 15 名の保護者の「希望進学先」をみると，回答の多いものの順に，「別海高校専攻科」の 60.0%（9 人），「農業大学校」の 20.0%（3 人），「4 年制大学」「専門・専修学校」「国内外の酪農実習」のそれぞれが 6.7%（1 名）ずつとなっており，そのほとんどが「別海高校専攻科」を希望していることがわかる。この傾向は，子どものそれとほぼ同じである。さらに，「希望する理由」についてみると，「本人が望んでいるから」の 66.7%（10 人）が最も多くなっているが，それを除くと，「さらに知識や技術

表 9 「進学してから自営」を希望する生徒の「進学先を選んだ理由」×「希望進学先」

上段：人，下段：%		進学先を選んだ理由													
		合計	さらに知識や技術を身に付けるため	地元と違う世界を経験したいから	友人関係を広げるため	家の手伝いをしながら学べるから	酪農を学ぶには地元の学校がよいから	家の経済的な負担を考えて	自分の学力（成績）を考えて	親がまだ若く就農しなくてもよいから	親が望んでいるから	先生が勧めるから	まだ就農したくないから	ただ何となく	その他
希望進学先	合　計	25 100.0	20 80.0	2 8.0	1 4.0	14 56.0	4 16.0	9 36.0	1 4.0	2 8.0	3 12.0	－	1 4.0	－	1 4.0
	4年制大学	1 100.0	1 100.0	－	－	－	－	－	－	－	1 100.0	－	－	－	－
	短期大学	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	農業大学校	4 100.0	4 100.0	1 25.0	－	－	－	2 50.0	－	－	－	－	－	－	－
	別海高校専攻科	18 100.0	14 77.8	－	1 5.6	14 77.8	4 22.2	7 38.9	1 5.6	－	2 11.1	－	1 5.6	－	1 5.6
	専門・専修学校	2 100.0	1 50.0	1 50.0	－	－	－	－	－	2 100.0	－	－	－	－	－
	国内外の酪農実習	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	未定	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	その他	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

資料出所：筆者の調査結果から作成した。

を身に付けるため」の 53.3%（8 人）が最も多く，次いで，「家の手伝いをしながら学べるから」の 46.7%（7 人）となっている。この傾向も，「希望進学先」の場合と同様に，子どものそれとほぼ同じである。

このように，保護者と子どもの双方の「希望進学先」とその進学先を「希望する理由」が同じ傾向を示すのは，両者とも「別海高校専攻科」への進学希望者が最も多くなっているからである。このことは，別海町の農家における子ども，とりわけ後継予定の高校生とその保護者にとって，先にも指摘した「家の手伝いをしなければならない」という高校卒業後の進学に対する制限要因が大きいことの証左でもある。また，このことに関してさらにいえば，酪農科を卒業する後継予定生徒とその保護者にとっての高校卒業後における上級学校への進学要求は，「別海高校専攻科」によって補完されているとみることができるのである。

そこで，酪農科における過去 12 年間（平成 5 年～16 年度）の後継予定生徒に関する進路の実態を詳細にみると，酪農学園大学をはじめ，帯広畜産大学草地別科，北海道立農業大学校および就職等，高校卒業後の進路先が多様化していることがわかる（表 10）。しかしながら，これら後継予定生徒の高校卒業後における進路先がいくら多様化しているとはいっても，その多くは，別海高校に併設されている農業特別専攻科（以下，単に専攻科）への進学者がほとんどである。すなわち，年度によって進学者数が少ない年もみられるが，この 12 年間の合計では 68 名を数え，その占める割合は 54.0%となっており，実際に，後継予定生徒の 2 人のうち 1 人が専攻科に進学しているのである。

このように，酪農科における後継予定生徒の多くが専攻科へ進学している大きな理由には，「家の手伝いをしなければならない」という高校卒業後の進学に対する制限要因が現実としてあ

表 10　別海高校酪農科における後継予定生徒の進路実態

期別 卒業年度	27 H 5	28 H 6	29 H 7	30 H 8	31 H 9	32 H10	33 H11	34 H12	35 H13	36 H14	37 H15	38 H16	合計 （人）
後継予定生徒数（人）	11	14	10	8	11	5	12	7	7	12	17	12	126
即自営	4	3		1	3			1			1	1	14
別海高校専攻科	7	10	8	4	7	3	5	2	5	4	12	1	68
酪農学園大学		1				1	1	1			1	1	6
その他大学					1	1							2
酪農学園短大			1	1									2
帯広畜大別科			1	1							1	3	6
道立農業大学校							3	2	2	4		1	12
道農業専門学校							1				1	1	3
国内・海外実習							1	1				2	4
酪農ヘルパー				1			1			2		1	5
酪農関連産業										2	1	1	4

資料出所：学校要覧各年度版をもとに進路指導部資料から作成した。

るからである。また，受け入れる側としての専攻科においても，そのことに対して，「家の手伝いをしながら学べる」という後継予定生徒とその保護者にとっての教育ニーズにしっかりと応えられているからである。つまり，それは，専攻科の独特なカリキュラムにあるといえよう。すなわち，専攻科の学習形態は，自家牧場（農場）における朝晩の搾乳作業に配慮して，登校時間 10：50～下校時間 14：40 までの授業時間が組まれ，「農業高校の卒業者が，農業自営者として定着するまでの 2 年間を自宅で営農を続けながら，経営面，生活面の指導が受けられる形態」[注44)] という定時制的な専攻科とされている通りの「地元の農業経営の実態に即して」展開されているという点である。

このことに関して，酪農科卒業後，専攻科へ進学した子どもを持つ保護者（平成 15 年度卒業，町内酪農家）は，以下のように述べている。

> 酪農科に通っているときから，作業面での影響というのが一番大きい。朝晩必ず牛舎の仕事を手伝ってもらえるということと，休みには草刈等の作業もやってもらえるという，これが遠くへの進学ともなれば，それがなくなっちゃいますよね。経済的な面もあるかもしれないけれど，作業面のはかなり大きい。……中略……酪農専業地帯だと，特に最近，規模的にもね，大きくなっちゃって，頭数かなり抱えてるから，1 人でも手伝ってもらえるのがいるのといないのとでは，かなり大きいんじゃないんですか。特に牧草の適期刈り逃すと大きいから。餌に影響して，1 年間の勝負決まっちゃうから。
>
> ―― 2005（平成 17）年 3 月 14 日のインタビュー調査から。

このことから，大型酪農専業経営における労働作業面の困難性が改めて想起されてよいだろう。

一方，別海高校酪農科・専攻科 OB，現在，別海町議会文教厚生常任委員・安部政博氏も同じような文脈で，以下のように述べている。

> もし，別海高校がどうして 3 間口しか置けないということになって，普通科だけになっ

たとして，今度は，普通科から農業大学校とか，酪農学園大学だとかに進む道も手だろうなと思ったんですけど，でも，すべての家庭がそこへ送れるわけでもないので，やっぱり，「地元にいて，仕事をしながら自分の家の経営もしながら通って，別海高校の酪農科を出て，専攻科を出る」という，そういうパターンが良いという家庭がかなりいるわけです。── 2005（平成 17）年 3 月 17 日のインタビュー調査から。

つまり，これらのインタビュー調査の結果は，農業後継者が進学のために自家・地元を離れるということに対して，別海町のような農業経営形態では，すべての農家がいまだそうすることができないという現実があることを指摘しているのである。したがって，酪農科と同様に，地元にあり，「働くこと」により重点を置きながら学ぶことができる専攻科は，酪農科と「接続」した高校卒業後の上級学校としても貴重な存在であるとともに，酪農科と合わせたその存続は，別海町の農家とその後継予定生徒にとって，〝現実的な教育要求〟にもなっているといえよう。

2．「農業後継者」の農業後継（就農）に関する意識と実態

これまで，主として，酪農科の「後継予定生徒」ならびに「保護者」における「酪農科への進学」や「専攻科・その他の進路」に関しての意識と実態についてみてきた。そのなかで，とりわけ強調されなければならないことは，酪農科に学ぶ農業後継を予定している生徒のうち，高校卒業後の進路決定の際に，「自家･地元から離れる」ということに対して，決して自由ではない生徒が少なからず存在しているという事実である。それは，家業である酪農の作業に従事しなければならないという「家の手伝い」が大きな制限要因になっていた。

しかしながら，高校時代から高校卒業という，一般的には〝自由を謳歌できる〟青年期にあって，「自家･地元から離れる」ことが制限されているにも関わらず，実際には，酪農科の多くの生徒が農業後継者として，学び，卒業し，その後就農しているということもまた事実である。

そこで，ここでは，酪農科の「後継予定生徒」とかつての酪農科の生徒であり，農業後継者として就農を予定している卒業生（以下，単に「卒業生」と記す）の農業後継（就農）に関する意識と実態についてみていきたい。

はじめに，「後継予定生徒」である 32 名の「家業（酪農）を後継する理由」についてみると，「後継ぎとして当然のことだから」の 56.3％（18 人）が最も多く，次いで，「自分のペースで仕事ができる自営業の良さがあるから」の 53.1％（17 人）となっている（表 11）。これらの回答の次に多かったものは，「酪農作業を手伝って，父母を助けたいと思ったから」「小さい時から接していて身近で入りやすい職業だから」の 40.6％（13 人）となっている。

一方，「卒業生」の「家業（酪農）を後継する理由」についてみると，回答の多いものの順に，「自分のペースで仕事ができる自営業の良さがあるから」の 60.0％（21 人），「小さい時から接していて身近で入りやすい職業だから」の 57.1％（20 人），「酪農経営には職業としての魅力を感じるから」の 54.3％（19 人）となっている（表 12）。しかし，「後継予定生徒」の回答として最も多かった，「後継ぎとして当然のことだから」は 34.3％（12 人）に止まっている。

以上のことから，これらの「後継予定生徒」と「卒業生」との回答結果を比較すると，農業後継（就農）に対する姿勢にやや違いがあるようにも思われる。すなわち，前者は，「後継ぎとして当然のことだから」「酪農作業を手伝って，父母を助けたいと思ったから」という回答結果に示されているように，「家」や「家族」のことを考えた農業後継（就農）であると推察される

表 11 「家業（酪農）を後継する理由」×「卒業後の希望進路」

上段：人，下段：%		家業（酪農）を後継する理由												
		合計	後継ぎとして当然のことだから	家の経済的なことを考えて	酪農作業を手伝って、父母を助けたいと思ったから	酪農経営には職業としての魅力を感じるから	自分のペースで仕事ができる自営業の良さがあるから	土や動植物相手の仕事が好きだから	農村での生活に愛着を持っているから	小さい時から接していて身近で入りやすい職業だから	父母など家族やまわりの人に言われたから	他にやりたい仕事がないから	あまり深くは考えずにただなんとなく	その他
卒業後の希望進路	合　計	32	18	5	13	13	17	10	2	12	4	2	－	1
		100.0	56.3	15.6	40.6	40.6	53.1	31.3	6.3	37.5	12.5	6.3	－	3.1
	即自営	2	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
		100.0	100.0											
	進学してから自営	25	14	4	12	12	14	8	2	11	4	2	－	－
		100.0	56.0	16.0	48.0	48.0	56.0	32.0	8.0	44.0	16.0	8.0	－	－
	他産業へ就職してから自営	3	2	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	1
		100.0	66.7				33.3							33.3
	未　定	2	－	1	1	1	2	2	－	1	－	－	－	－
		100.0		50.0	50.0	50.0	100.0	100.0		50.0				

資料出所：筆者の調査結果から作成した。

表 12 「卒業生」の「家業（酪農）を後継する理由」×専攻科と専攻科以外

上段：人，下段：%		家業（酪農）を後継する理由												
		合計	後継ぎとして当然のことだから	家の経済的なことを考えて	酪農作業を手伝って、父母を助けたいと思ったから	酪農経営には職業としての魅力を感じるから	自分のペースで仕事ができる自営業の良さがあるから	土や動植物相手の仕事が好きだから	農村での生活に愛着を持っているから	小さい時から接していて身近で入りやすい職業だから	父母など家族やまわりの人に言われたから	他にやりたい仕事がないから	あまり深くは考えずにただなんとなく	その他
区分	合　計	35	12	4	14	19	21	8	9	20	－	2	4	2
		100.0	34.3	11.4	40.0	54.3	60.0	22.9	25.7	57.1		5.7	11.4	5.7
	専攻科	19	8	2	5	9	12	3	3	11	－	2	2	1
		100.0	42.1	10.5	26.3	47.4	63.2	15.8	15.8	57.9		10.5	10.5	5.3
	専攻科以外	16	4	2	9	10	9	5	6	9	－	－	2	1
		100.0	25.0	12.5	56.3	62.5	56.3	31.3	37.5	56.3			12.5	6.3

資料出所：筆者の調査結果から作成した。

のに対し，後者は，「自分のペースで仕事ができる自営業の良さがあるから」「小さい時から接していて身近で入りやすい職業だから」「酪農経営には職業としての魅力を感じるから」という上位３つの回答結果からもわかるように，自己の意志と価値観によって「職業としての家業」を選択しているようにみえるのである。

これらの違いは，やや単純化していってしまえば，それらの年齢と現在の置かれている立場によるものと考えられる。つまり，後者の「卒業生」の場合でいえば，その多くは，就学途中の者もいるが，専攻科の学生も含めて，すでに成人し，家業の酪農に従事している者がかなり

含まれており，高校を卒業してからその家業である酪農に従事していく経験を通して，〝経営に対する責任感〟とでもいうべき態度がしだいに醸成されていったことによると考えられるのである。

また，このような農業後継（就農）に対する姿勢に関してさらにいえば，一般的に，「後継者養成としての農業教育はそう早く行う必要はないし，基礎学力を身につけておけば高校卒業後の方がよい。また，職業選択は原則としておそい方がよい」[注45)]（傍点引用者）とされるが，酪農科に学ぶ（学んだ）農業後継者の多くは，「強いられた選択」を無自覚的に含み込んでいる可能性を全く否定することはできないが，このようにみると，農業後継を宿命づけられた子どもが，職業選択の自由もままならず，半ばあきらめとして後継している姿では決してないと思えるのである。それよりも，むしろ，家業の酪農を「職業」として，積極的に後継している〝別海町に生きる高校生たち〟のリアルな現実とでもいうべき側面が表されているとみることができるのである。

したがって，農業後継（就農）を志望する子ども・青年に対して，家庭や地域，そして学校が，そのことをどれだけ〝励ます〟ことができるかは，別海町にとっても，地域社会の形成・維持・発展という意味において，重要な「教育課題」であるといってよいだろう。このうち，後者においては，ほとんどの子ども・青年が学校を〝通過〟していくなか，学校教育を経験していく現実をみれば，学校が与える影響は決して小さくはないといえよう。その現代学校の基本的な役割の１つに，乾彰夫が述べる「将来の職業と労働にむけて子ども・青年の進路選択をはげます」[注46)]（傍点引用者）ということが含まれるのである。

そこで，このことに関連して，以下では，酪農科という「学校の影響」についてみていきたい。

まずは，「後継予定生徒」の「酪農科に入学する前から酪農をやる意志の有無」（以下，「意志の有無」と記す）をみると，「全くなかった」とする者はおらず，「あった」が 76.5％（26 人），「あまりなかった」が 17.6％（６人）となっており，「後継予定生徒」のほとんどが，すでに，高校に入学する前の段階から農業後継（就農）を決意していることがわかる（表 13）。

さらに，「酪農科に入学後，酪農をやる意志が強くなったか」（以下，「意志が強くなったか」と記す）をみると，先ほどの「あった」26 人のうち，21 人が「強くなった」（「はい」という回答結果）としている（80.8％）。また，ここで，とりわけ注目したいのは，「意志の有無」が「あまりなかった」６人の全員が「酪農科に入学して酪農をやる意志が強くなった」（「はい」とい

表 13　「後継予定生徒」の「酪農科に入学後，酪農をやる意志が強くなったか」×「酪農科に入学する前から酪農をやる意志の有無」

上段：人，下段：％		酪農科に入学後，酪農をやる意志が強くなったか			
		合　計	は　い	いいえ	わからない
酪農科に入学する前から酪農をやる意志の有無	合　計	32 100.0	27 84.4	1 3.1	4 12.5
	あった	26 100.0	21 80.8	1 3.8	4 15.4
	あまりなかった	6 100.0	6 100.0	－	－
	全くなかった	－	－	－	－

資料出所：筆者の調査結果から作成した。

う回答結果）としていることである（「あった」26人との合計で84.4%）。このことは，酪農科における学習やその環境が彼らの農業後継（就農）の意志や意欲に対して，何らかの形で影響を及ぼしたことを示唆している。

そこで，「酪農科に入学して酪農をやる意志が強くなった」27人の理由についてみると，回答の多いものの順に，「同じ酪農後継者としての友達や先輩との交流によって」の51.9%（14人），「酪農Ⅰや農業経営等の専門科目の授業を受けて」の44.4%（12人），「ホームプロジェクトをやって」の37.0%（10人）となっている（表14）。

これらのことは，「卒業生」の回答結果においてもまったく同じ傾向が示されている。すなわち，「意志の有無」の「あった」24人と「あまりなかった」6人の「意志が強くなったか」は，前者で23人が，後者で6人全員が「強くなった」（「はい」という回答結果）としており（合計で96.7%），その理由においても，「同じ酪農後継者としての友達や先輩との交流によって」の72.4%（21人）が最も多く，次いで，「畜産や農業会計等の専門科目の授業を受けて」「ホームプロジェクトをやって」の65.5%（19人）となっているのである（表15および表16）。

以上のことから，農業後継（就農）の意志や意欲の醸成に対して，普段の「農業や酪農に関する教科・科目」の授業も重要な要因になってはいるが，それ以上に大切なことは，「同じ酪農後継者としての友達や先輩との交流によって」という回答結果にも表されているように，農業後継（就農）という同じ目標や夢を持った者同士が集い，そこで，〝支えたり，支えられたり〟といった関係を共有することのできる「場」にあるといえよう。別言すれば，それは，「学校」という場において展開される，同じ目標や夢を持った者同士が集い，影響し合う，いわゆる「潜在的カリキュラム」に拠った「仲間・ネットワークづくり」の重要性が表されているのである。

最後に，農業後継者の実態をより深く捉えるために，彼らが抱えている「就農への不安」についてもみてみると，「後継予定生徒」の不安の割合が多いものの順に，「経営の経理がうまくできるか」の84.4%（27人），「結婚相手を得ることができるか」の78.1%（25人），「経営の

表14　「後継予定生徒」の「酪農科に入学後，酪農への意欲が高まった理由」×「酪農科に入学する前から酪農をやる意志の有無」

上段：人，下段：%		酪農科に入学後，酪農への意欲が高まった理由											
		合計	酪農Ⅰ・Ⅱ・Ⅲや農業経営など専門科目の授業を受けて	国語や数学など一般科目の授業を受けて	ホームプロジェクトをやって	1年次の酪農研修をやって	2年次の委託実習をやって	3年次の海外研修に行って	試験場や酪農関連施設，全道共進会などの視察に行って	農業クラブ活動によって	同じ酪農後継者としての友達や先輩との交流によって	酪農科の先生方との交流によって	その他
酪農をやる意志の有無	合　計	27 100.0	12 44.4	―	10 37.0	5 18.5	6 22.2	4 14.8	7 25.9	1 3.7	14 51.9	4 14.8	―
	あった	21 100.0	9 42.9	―	8 38.1	4 19.0	4 19.0	2 9.5	5 23.8	1 4.8	11 52.4	3 14.3	―
	あまりなかった	6 100.0	3 50.0	―	2 33.3	1 16.7	2 33.3	2 33.3	2 33.3	―	3 50.0	1 16.7	―
	全くなかった	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―

資料出所：筆者の調査結果から作成した。

表 15 「卒業生」の「酪農科に入学後，酪農をやる意志が強くなったか」×「酪農科に入学する前から酪農をやる意志の有無」

上段：人，下段：%		酪農科に入学後，酪農をやる意志が強くなったか			
		合　計	は　い	いいえ	わからない
酪農科に入学する前から酪農をやる意志の有無	合　計	30 100.0	29 96.7	－	1 4.2
	あった	24 100.0	23 95.8	－	1 4.2
	あまりなかった	6 100.0	6 100.0	－	－
	全くなかった	－	－	－	－
	わからない	(5) (100.0)	－	－	－

資料出所：筆者の調査結果から作成した。

表 16 「卒業生」の「酪農科に入学後，酪農への意欲が高まった理由」×「酪農科に入学する前から酪農をやる意志の有無」

上段：人，下段：%		酪農科に入学後，酪農への意欲が高まった理由											
		合計	畜産や農業会計など専門科目の授業を受けて	国語や数学など一般科目の授業を受けて	ホームプロジェクトをやって	1年次の酪農研修をやって	2年次の委託実習をやって	3年次の海外研修に行って	試験場や酪農関連施設、全道共進会などの視察に行って	農業クラブ活動によって	同じ酪農後継者としての友達や先輩との交流によって	酪農科の先生方との交流によって	その他
酪農をやる意志の有無	合　計	29 100.0	19 65.5	－	19 65.5	4 13.8	11 37.9	14 48.3	13 44.8	2 6.9	21 72.4	10 34.5	－
	あった	23 100.0	15 65.2	－	17 73.9	4 17.4	10 43.5	13 56.5	12 52.2	2 8.7	17 73.9	8 34.8	－
	あまりなかった	6 100.0	4 66.7	－	2 33.3	－	1 16.7	1 16.7	1 16.7	－	4 66.7	2 33.3	－
	全くなかった	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

資料出所：筆者の調査結果から作成した。
注）「あった」人数は，実際には 24 人であるが，ここでは「酪農科に入学後，酪農をやる意志が強くなったか」の問いに対して「わからない」という回答の 1 名が除外されている。

転換や投資に際して的確な判断ができるか」の 68.8%（22 人）となっている（図 4）。また，このことは，「卒業生」の回答結果においてもまったく同じ傾向が示されているが，それよりもさらに不安の程度は深刻さを増していることがわかる。すなわち，「経営の経理がうまくできるか」では，35 名の全員が「不安がある」という回答結果にも代表されるように，どの項目においても，「後継予定生徒」のそれより不安の占める割合が多くなっているのである（図 5）。

以上のことから，「就農への不安」は，「後継予定生徒」よりも「卒業生」の方が，すでに，実際の酪農経営に従事している分，より現実的に，より大きなものとして感じられている様子が推察される。しかし，全体的には，「後継予定生徒」と「卒業生」とに関わらず，ほとんどの「農業後継者」は，就農（農業後継）に対する不安を極めて強く抱いているといえよう[注47)]。

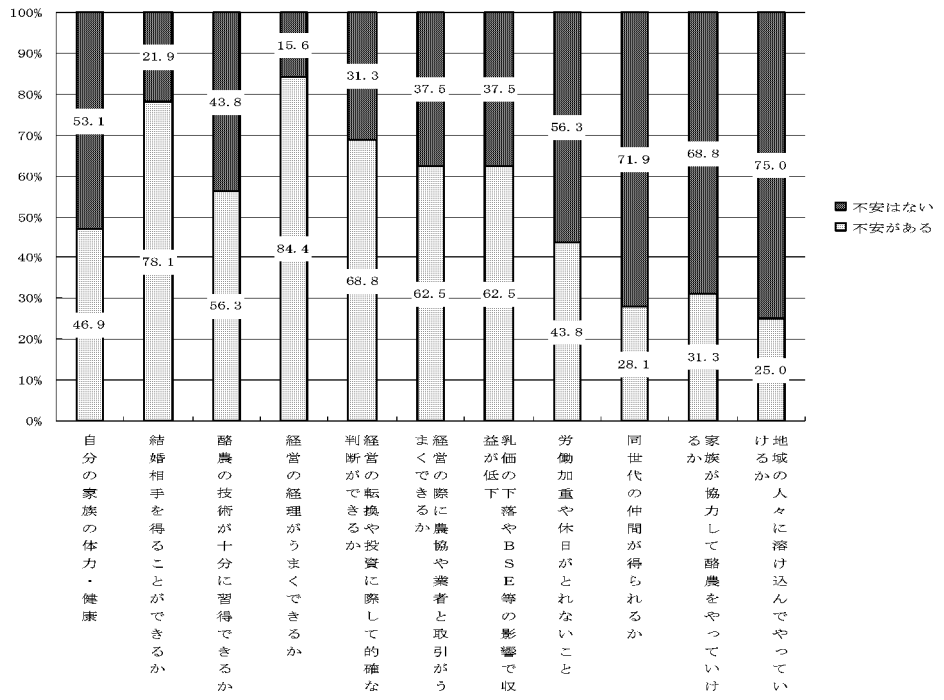

図 4 「後継予定生徒」が抱える「就農への不安」

資料出所：筆者の調査結果から作成した。

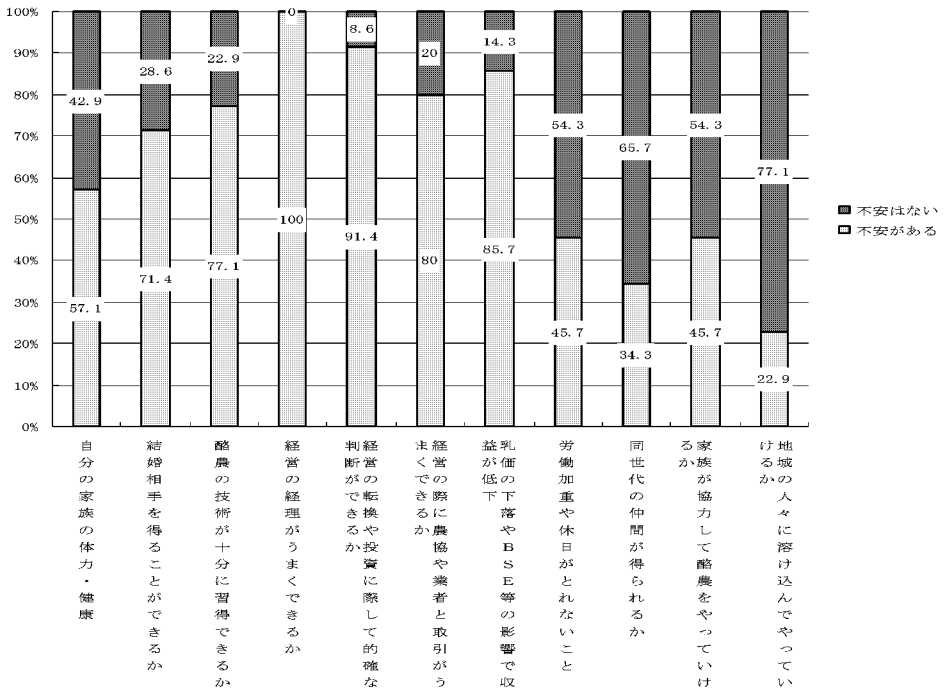

図 5 「卒業生」が抱える「就農への不安」

資料出所：筆者の調査結果から作成した。

そこで，このことに関わって，いま一度，農業高校・農業学科の持つ教育的な機能について考えてみるならば，すでに，農業高校教育は，「農業教育に対する社会的な要請は，完成教育を目指すのではなく」「職業のための準備教育を行う」と述べられているように[注48]，完成教育の場から生涯教育における準備教育の場へとその性格が転換されている。このことは，近年の「――スペシャリストへの道 ―― 職業教育の活性化方策に関する調査研究会議（最終報告）」[注49] ～「今後の専門高校における教育の在り方等について(答申)」[注50]において，将来のスペシャリストとして，高校の段階では必要な専門性の基礎・基本を重視し，卒業後，職場や大学等の教育機関でさらに継続して教育を受け，そこで専門性を習得することが望ましいという主旨をみても明らかであろう。

しかしながら，先にも述べたように，農業後継（就農）の意志や意欲の醸成は，農業高校・農業学科という「場」の持つ意義が強調され，また，別海町の例でいえば，大学等の上級学校への進学が制限されている農業後継を予定している高校生が確かに存在しており，したがって，そのような高校生にとっては，専門性の習得をそれらの上級学校へと先延ばしすることはできず，高校の段階における，就農に向けた「専門的な学習」[注51]がやはり必要だといえる。

さらに，農業後継者が強く抱いている「就農への不安」は，農業高校・農業学科が解決していかなければならない大きな課題ともいえる。それは，決して，他の学科でも良いというものではなく，それこそが，農業高校・農業学科の持つ教育的な機能の１つとして，農業後継者の将来の（家業という）職業と労働に向けて，その進路選択を励ましていくことに他ならないと考えるのである。

３．別海町内の中学生・保護者の高校選択と「別海高校酪農科の在り方」

前節までは，別海高校酪農科の生徒・卒業生および保護者を対象に，とりわけ農業後継を予定している生徒に着目して，その「農業後継者」とされる高校生の意識と実態を通したなかから，別海町という，酪農を重要な基幹産業としている地域に唯一存立する別海高校酪農科の意義について考察してきた。

同様に，本節においても，今度は高校の存立に直接的な影響を及ぼす中学生とその保護者，ここでは，別海町内の中学生とその保護者を対象として，それぞれのアンケート調査の結果から別海高校酪農科の意義を検討してみたい。

はじめに，別海町内の中学生（以下，単に「中学生」と記す）の「希望する高校」をみると，「別海高校普通科」（以下，単に「普通科」と記す）の 52.7%（253 人）が最も多く，次いで，「別海高校酪農科」（以下，単に「酪農科」と記す）の 12.5%（60 人）となっている。また，「希望する高校の選択理由〈A〉」と「希望する高校」との関係をみると，「普通科」は，「ただ何となく」の 37.9%（96 人）が最も多く，次いで，「自分の成績に合っているから」の 30.0%（76 人），「親がすすめるから」の 25.3%（64 人）となっているのに対して，「酪農科」は，「自分の成績に合っているから」という理由も確認されるが，それとならんで，「家業の酪農を継ぐため」「実習や実技が好きだから」の 31.7%（19 人）が選択理由の上位になっている（表 17）。他方，「希望する高校の選択理由〈B〉」と「希望する高校」との関係をみると，「酪農科」は，「希望する高校の選択理由〈A〉」の場合と同様に，普通科とは違った傾向を示し，すなわち，「家（酪農）の手伝いをしながら学べるから」の 50.0%（30 人）が最も多く，次いで，「通学に便利だから」の 48.3%（29 人）となっている（表 18）。

表 17　「希望する高校の選択理由〈A〉」×「希望する高校」

上段：人 下段：%		希望する高校の選択理由〈A〉												
		合計	好きな勉強ができるから	実習や実技が好きだから	自分の成績に合っているから	大学などの進学実績があるから	就職の実績があるから	家業の酪農をつぐため	部活動や学校行事がさかんだから	その高校・科の先生方はよくめんどうをみてくれるから	担任がすすめるから	親がすすめるから	ただ何となく	なし
高校進学の際の希望する高校	合　計	445 100.0	56 12.6	39 8.8	121 27.2	35 7.9	22 4.9	21 4.7	115 25.8	11 2.5	2 0.4	96 21.6	128 28.8	30 6.7
	別海普通科	253 100.0	19 7.5	7 2.8	76 30.0	13 5.1	12 4.7	－	56 22.1	4 1.6	1 0.4	64 25.3	96 37.9	15 5.9
	別海酪農科	60 100.0	12 20.0	19 31.7	19 31.7	－	2 3.3	19 31.7	11 18.3	3 5.0	－	10 16.7	11 18.3	1 1.7
	中標津	55 100.0	7 12.7	3 5.5	9 16.4	7 12.7	－	－	19 34.5	2 3.6	－	11 20.0	14 25.5	6 10.9
	標津	6 100.0	2 33.3	－	3 50.0	－	3 50.0	－	2 33.3	－	－	－	1 16.7	－
	羅臼	1 100.0	1 100.0	－	－	－	－	1 20.0	－	－	－	－	－	－
	中標津農業	5 100.0	1 20.0	2 40.0	－	－	－	－	2 40.0	1 20.0	－	1 20.0	－	1 20.0
	根室	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	根室西	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	標茶	9 100.0	3 33.3	2 22.2	4 44.4	－	1 11.1	－	3 33.3	1 11.1	－	1 11.1	2 22.2	－
	釧路管内	27 100.0	2 7.4	3 11.1	5 18.5	8 29.6	2 7.4	－	10 37.0	－	1 3.7	7 25.9	3 11.1	3 11.1
	根室釧路以外	29 100.0	9 31.0	3 10.3	5 17.2	7 24.1	2 6.9	1 3.4	12 41.4	－	－	2 6.9	1 3.4	4 13.8

資料出所：筆者の調査結果から作成した。

以上のことから，「中学生」の多くは，別海高校を志望しているが，このうち，「普通科」を志望する「中学生」が割合的にも多いといえよう。しかし，高校を選択する理由をみると，「普通科」と「酪農科」との間では，それぞれ違った傾向が示されている。すなわち，「酪農科」では，学習面の理由として「家業の酪農を継ぐため」および「実習や実技が好きだから」が，また，学習面以外の理由として「家（酪農）の手伝いをしながら学べるから」がそれぞれ多くなっている。このことは，「普通科」を志望する「中学生」の層と「酪農科」を志望する「中学生」の層が持つ性質がそれぞれに異なっていることを表している。つまり，「酪農科」を志望する「中学生」のなかには，全体的な人数からみれば決して多くはないが，「家業の酪農を継ぐため」と「家（酪農）の手伝いをしながら学べるから」という理由が示す通り，農業後継者が含まれているのである。

これに対して，「中学生」の保護者の回答結果をみると，高校への進学を希望している保護者の「希望する高校」は，「普通科」の 56.1%（161 人）が最も多く，次いで，「酪農科」の 13.2%

表 18 「希望する高校の選択理由〈B〉」×「希望する高校」

上段：人 下段：%		希望する高校の選択理由〈B〉											
		合計	通学に便利だから	通学費や学費が安いから	家（酪農）の手伝いをしながら学べるから	学校の伝統があるから	学校・科の雰囲気がよいから	施設・設備がよいから	制服の印象がよいから	友達が行くから	先輩がいるから	親の母校だから	なし
高校進学の際の希望する高校	合　計	445 100.0	266 59.8	50 11.2	36 8.1	16 3.6	67 15.1	56 12.6	45 10.1	77 17.3	60 13.5	23 5.2	55 12.4
	別海普通科	253 100.0	202 79.8	33 13.0	3 1.2	5 2.0	31 12.3	28 11.1	25 9.9	64 25.3	33 13.0	11 4.3	10 4.0
	別海酪農科	60 100.0	29 48.3	12 20.0	30 50.0	2 3.3	6 10.0	5 8.3	3 5.0	3 5.0	6 10.0	3 5.0	5 8.3
	中標津	55 100.0	22 40.0	3 5.5	—	4 7.3	10 18.2	8 14.5	5 9.1	8 14.5	10 18.2	4 7.3	11 20.0
	標津	6 100.0	4 66.7	—	—	—	2 33.3	—	1 16.7	1 16.7	2 33.3	—	1 16.7
	羅臼	1 100.0	—	—	1 100.0	—	—	—	—	—	—	—	—
	中標津農業	5 100.0	2 40.0	2 40.0	2 40.0	1 20.0	2 40.0	—	1 20.0	—	2 40.0	1 20.0	—
	根室	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	根室西	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	標茶	9 100.0	2 22.2	—	—	—	2 22.2	3 33.3	4 44.4	—	3 33.3	2 22.2	1 11.1
	釧路管内	27 100.0	4 14.8	—	—	1 3.7	5 18.5	4 14.8	2 7.4	1 3.7	3 11.1	1 3.7	13 48.1
	根室釧路以外	29 100.0	1 3.4	—	—	3 10.3	9 31.0	8 27.6	4 13.8	—	1 3.4	1 3.4	14 48.3

資料出所：筆者の調査結果から作成した。

(38 人) となっている。この傾向も，「中学生」の場合とまったく同じである。また，「希望する高校の選択理由〈A〉」と「希望する高校」との関係をみると，これも全体的な傾向は，「中学生」の場合とほぼ同じである。すなわち，「酪農科」は，「子どもの成績に合っているから」という理由も確認されるが，それとならんで，「家業の酪農を継ぐため」の 38.5%（15 人）が最も多く，次いで，「本人の希望」「実習や実技が好きだから」の 35.9%（14 人）が選択理由の上位になっている。他方，「希望する高校の選択理由〈B〉」と「希望する高校」との関係をみると，「普通科」は，「通学に便利だから」が顕著に多く，次いで，「通学費や学費が安いから」「学校・科の雰囲気が良いから」となっているが，「酪農科」は，「通学に便利だから」「通学費や学費が安いから」に次いで，「家（酪農）の手伝いをしながら学べるから」の 46.2%（18 人）が多くなっている。この「普通科」と「酪農科」との特徴的な違いは，「中学生」の場合にもみられたものである。

以上のことから，全体的な高校選択に関する意識は，「中学生」と保護者との間で，それほど

大きな違いはないといえよう。しかし，「酪農科」を希望した保護者のなかにみられた，「家(酪農）の手伝いをしながら学べるから」は，これまでに何度もみてきた通り，別海町の農家が高校を選択する際の現実的な理由として注目されるべきである。

続いて，別海町内の中学生とその保護者のうち，農業後継を予定している生徒とその保護者に着目して，それぞれの高校選択の特徴をみると，「中学生」のうち，「家が農家の人は，将来，家業（酪農）を後継しますか。あるいは，家が農家でない人でも，将来，酪農（または農業）をやりたいと思いますか」の問いに対して，「はい」「いいえ」「まだわからない」は，それぞれ順に，7.3%（39 人），74.3%（399 人），18.4%（99 人）となっている。このうち，「はい」と回答した「中学生」のうち，家の職業が農家の生徒（以下，「後継予定中学生」と記す）は，学年別にそれぞれ，1 年生が 14 名，2 年生が 9 名，3 年生が 9 名の合計 32 名となっている。したがって，現時点において，1 学年に平均で 10 名程度の農業後継者がいることがわかる。

また，この「後継予定中学生」の「家業（酪農）を後継する理由」についてみると，「酪農作業を手伝って，父母を助けたいと思ったから」の 59.4%（19 人）が最も多く，次いで，「小さい時から接していて身近で入りやすい職業だから」の 56.3%（18 人）となっている（表 19）。これらの回答の次に多かったものは，「後継ぎとして当然のことだから」の 40.6%（13 人）となっている。

一方，「後継予定中学生」の「希望する高校」をみると，「酪農科」の 65.6%（21）が顕著に多く，次いで，「根室釧路管内以外の高校」の 9.4%（3 人），「普通科」「中標津農業高校」の 6.3%（2 人）となっている。さらに，その「希望する高校の選択理由〈A〉〈B〉」についてみると，〈A〉では，「家業の酪農を継ぐため」の 63.3%（19 人）が（表 20），〈B〉では，「家（酪農）の手伝いをしながら学べるから」の 60.0%（18 人）が顕著に多くなっている（表 21）。

以上のことから，「後継予定中学生」のほとんどは，「家（酪農）の手伝いをしながら学べるから」という理由にも示されているように，別海高校酪農科を志望しており，また，その姿勢に関しては，「家業の酪農を継ぐため」という理由をみてもわかるように，積極的な高校選択であるといえよう。このことは，家業(酪農）を後継する理由で最も多かった「酪農作業を手伝って，父母を助けたいと思ったから」とを合わせて考えると，その「学習の場」の必要性を訴え

表 19 「後継予定生徒」の「家業（酪農）を後継する理由」」

（上段：人，下段：%）

家業（酪農）を後継する理由												
後継ぎとして当然のことだから	家の経済的なことを考えて	酪農作業を手伝って、父母を助けたいと思ったから	酪農経営には職業としての魅力を感じるから	自分のペースで仕事ができる自営業の良さがあるから	土や動植物相手の仕事が好きだから	農村での生活に愛着を持っているから	小さい時から接していて身近で入りやすい職業だから	父母など家族やまわりの人に言われたから	他にやりたい仕事がないから	あまり深くは考えずになんとなく	その他	合計
13	1	19	10	10	7	6	18	3	4	2	1	32
40.6	3.1	59.4	31.3	31.3	21.9	18.8	56.3	9.4	12.5	6.3	3.1	100.0

資料出所：筆者の調査結果から作成した。

表 20 「後継予定生徒」の「希望する高校の選択理由〈A〉」

（上段：人，下段：%）

希望する高校の選択理由〈A〉												
好きな勉強ができるから	実習や実技が好きだから	自分の成績に合っているから	大学などの進学実績があるから	就職の実績があるから	家業の酪農をつぐため	部活動や学校行事がさかんだから	その高校・科の先生方はよくめんどうをみてくれるから	担任がすすめるから	親がすすめるから	ただ何となく	なし	合計
5	6	6	2	—	19	5	—	—	6	2	—	30
16.7	20.0	20.0	6.7		63.3	16.7			20.0	6.7		100.0

資料出所：筆者の調査結果から作成した。
注）実際の合計人数は 32 名だが，ここでは「未定」の 2 名が除外されている。

表 21 「後継予定生徒」の「希望する高校の選択理由〈B〉」

（上段：人，下段：%）

希望する高校の選択理由〈B〉											
通学に便利だから	通学費や学費が安いから	家（酪農）の手伝いをしながら学べるから	学校の伝統があるから	学校・科の雰囲気がよいから	施設・設備がよいから	制服の印象がよいから	友達が行くから	先輩がいるから	親の母校だから	なし	合計
11	6	18	1	3	2	—	—	2	2	4	30
36.7	20.0	60.0	3.3	10.6	6.7			6.7	6.7	13.3	100.0

資料出所：筆者の調査結果から作成した。
注）実際の合計人数は 32 名だが，ここでは「未定」の 2 名が除外されている。

る切実さが推察されるのである。

そして，このことに関連して，別海高校酪農科の農業後継を予定している生徒が，高校を卒業するに当たっての想いを書いた作文（新聞掲載）によれば，以下のようである。

酪農頑張り両親に楽を　高 3　長沼　徹（根室管内別海町）

―― 発言します　未来の自分へ

未来のことは，未来になってみないとわかりません。ただ，私には，望んでいる職業があります。それは酪農です。

おやじの代からの経営を私が引き継ぎ，経営規模を拡大したいと思っています。果たして自分に酪農経営ができるだろうか。卒業間近になって，私はよくそんなことを考えるようになりました。

親の前では絶対に言わないけれど，私はおやじのことをとても尊敬しています。人に

雇われることなく，一人で家族のために必死で頑張っています。風呂ではいつも，疲れて寝ています。

未来の自分は，おやじのように必死に働き，牧場を今よりもでかくし，両親に楽をさせてあげたいと思っています。── 北海道新聞朝刊，2004（平成16）年3月18日，（8）から

したがって，このような生徒の存在は，「別海高校酪農科の存続問題」を考える上でも極めて示唆的である。つまり，全体からみると決して多くはない，農業後継を志望している生徒の「学習の場」をどのように確保するのかという問題は，生徒の多寡による，いわゆる「数の議論」として，単純化され，矮小化されてしまうものではなく，広く教育的な視点でみた場合に，とりわけ重要な教育問題となり得るものなのである。それはまた，これまでにも繰り返し述べてきた通り，別海町の基幹産業である酪農を守る上でも看過されてはならない地域の教育問題なのである。

これに対して，「中学生」の保護者の回答結果では，「将来の希望する職業」のうち「酪農後継者」は全体の7.3%（21人）となっており，この保護者21名の「希望する高校」についてみると，「酪農科」の66.7%（14人）が顕著に多く，次いで，「普通科」の23.8%（5人），「標茶高校」「根室釧路管内以外の高校」の4.8%（1人）となっている。さらに，この保護者の「希望する高校の選択理由〈A〉〈B〉」についてみると，〈A〉では，「家業の酪農を継ぐため」の66.7%（14人）が顕著に多く，他方，〈B〉では，「家（酪農）の手伝いをしながら学べるから」の61.9%（13人）が最も多く，次いで，「通学に便利だから」の52.4%（11人），「通学費や学費が安いから」の47.6%（13人）となっている。

以上のことから，「後継予定中学生」の保護者の場合も生徒のそれと同じ傾向が示されており，したがって，保護者という立場からも改めて，子どもの「学習の場」の確保という教育問題が確認できるのである。

最後に，別海高校酪農科の存続問題に鋭く関わって，「中学生」の保護者に対して，以下のような2つの質問を行った。

【質問1】

少子化（生徒数減）のため，旧根室第2学区（4町）の高校では，平成19年度以降に普通科で1～2間口の削減が必要とされています。また，平成20年度以降には，定時制職業科のあり方が見直されそうです。こうしたなか，将来，もしも別海高校が間口減の対象となった場合，どのような選択が妥当だと思いますか。1つ選んで下さい。注）間口＝学年のクラス数　現在，別海高校は全日制普通科3間口，昼間定時制酪農科1間口

1．普通科3間口とする
2．普通科2間口，酪農科（定時制または全日制）1間口とする
3．その他
4．わからない

【質問2】

町の基幹産業である酪農の後継者養成の場として，別海高校酪農科（昼間定時制）は

存在しますが，その別海高校酪農科（昼間定時制）の今後のあり方について，どのよう形が望ましいと思いますか。１つ選んで下さい。

1．現在の昼間定時制のまま酪農科として継続する
2．酪農科のまま全日制に転換する
3．酪農科以外の学科（全日制）を検討する
4．学科はわからないが，定時制（昼間または夜間）は継続する
5．その他
6．わからない

その結果，【質問１】では，「普通科２間口，酪農科（定時制または全日制）１間口とする」の 51.5％（153 人）が最も多く，次いで，「わからない」の 24.2％（72 人），「普通科３間口とする」の 21.2％（63 人）となっている（表 22）。また，この回答結果と「職業」および「希望の高校」との関係をみると，前者では，ほとんどの職業において，「普通科２間口，酪農科（定時制または全日制）１間口とする」が多くなっているが，そのうち，「酪農業」のそれが顕著に多く，逆に「漁業」「建築・建設業」のそれが少なく，「普通科３間口とする」がわずかに多くなっている。後者では，どの「希望の高校」においても，「普通科２間口，酪農科（定時制または全日制）１間口とする」が多くなっている。

他方，【質問２】では，「現在の昼間定時制のまま酪農科として継続する」の 40.7％（121 人）が最も多く，次いで，「酪農科のまま全日制に転換する」の 33.3％（99 人），「わからない」の 19.5％（58 人）となっている（表 23）。これに対して，「酪農科以外の学科（全日制）を検討する」「学科はわからないが，定時制（昼間または夜間）は継続する」はごく僅少であった。また，この回答結果と「職業」および「希望の高校」との関係をみると，前者では，「酪農業」の「現在の昼間定時制のまま酪農科として継続する」が最も多く，逆に，「会社員」「団体職員」のそれは少なく，「酪農科のまま全日制に転換する」がわずかに多くなっている。後者では，ほとんどの「希望の高校」において，「現在の昼間定時制のまま酪農科として継続する」が多くなっているが，「中標津高校」「標茶高校を除く釧路管内の高校」「根室釧路管内以外の高校」のそれは少なく，「酪農科のまま全日制に転換する」がわずかに多くなっている。

以上のことから，「中学生」の保護者においては，概して，酪農科の存続を望む声が多いといえよう。また，その課程（形態）は，現在の「昼間定時制」のままが支持されていると考えられる。

このように，ここでは，上記のような結果が得られたが，勿論，これが「酪農科の存続」にそのまま結び付くものではない。しかしながら，この回答結果にも示されているように，そこには，保護者の職業や子どもの高校進学に際して，希望する高校・学科がそれぞれ違っていても，酪農科の存続を望む声があるということはやはり注目すべきであろう。

また，このことは，これまでにも何度か述べてきた，別海町における「『地域課題』の自覚と共有」という〝意識〟を町全体が連帯してきたことを証明するものでもある。つまり，このことに関して，別海町長・佐野力三氏は，以下のように述べている。

もともと「道立」別海高校は，町立の酪農高等学校から始まりました。つまり，酪農後継者を育てようと，そのために高校をつくろうと，そういうところが原点です。

表 22　「別海高校酪農科が間口減となった場合の妥当な学科編制」×「職業」+「希望する高校」

上段：人，下段：%		別海高校酪農科が間口減となった場合の妥当な学科編制				
		合　計	普通科 3 間口とする	普通科 2 間口酪農科（定・全）1 間口	その他	わからない
職業	合　　計	297 100.0	63 21.2	153 51.5	9 3.0	72 24.2
	公務員	25 8.4	5 1.7	9 3.0	1 0.3	10 3.4
	会社員	50 16.8	16 5.4	22 7.4	2 0.7	10 3.4
	団体職員	27 9.1	6 2.0	16 5.4	1 0.3	4 1.3
	酪農業	111 37.4	11 3.7	77 25.9	1 0.3	22 7.4
	漁業	33 11.1	13 4.4	11 3.7	—	9 3.0
	建築・建設業	6 2.0	3 1.0	2 0.7	—	1 0.3
	サービス業	1 0.3	1 0.3	—	—	—
	自営業	25 8.4	5 1.7	8 2.7	3 1.0	9 3.0
	パート・アルバイト	8 2.7	2 0.7	3 1.0	—	3 1.0
	その他	11 3.7	1 0.3	5 1.7	1 0.3	4 1.3
希望する高校	合　　計	297 100.0	63 21.6	148 50.9	9 3.1	71 24.4
	別海普通科	160 55.0	50 17.2	70 24.1	6 2.1	34 11.7
	別海酪農科	39 13.4	—	32 11.0	1 0.3	6 2.1
	中標津	34 11.7	7 2.4	15 5.2	—	12 4.1
	標津	2 0.7	—	1 0.3	—	1 0.3
	羅臼	—	—	—	—	—
	中標津農業	2 0.7	—	1 0.3	—	10.3
	根室	—	—	—	—	—
	根室西	—	—	—	—	—
	標茶	3 1.0	—	2 0.7	—	1 0.3
	標茶を除く釧路管内	14 4.8	2 0.7	10 3.4	—	2 0.7
	根室釧路管内以外	9 3.1	1 0.3	5 1.7	—	3 1.0
	未定	28 9.6	3 1.0	12 4.1	2 0.7	11 3.8

資料出所：筆者の調査結果から作成した。

表 23 「別海高校酪農科（昼間定時制）の今後の在り方」×「職業」+「希望する高校」

上段：人，下段：%		別海高校酪農科（昼間定時制）の今後の在り方						
		合計	現在の昼間定時制のまま酪農科として継続する	酪農科のまま全日制に転換する	酪農科以外の（全日制）を検討する	学科はわからないが，定時制（昼間または夜間）は継続する	その他	わからない
職業	合　計	297 100.0	121 40.7	99 33.3	9 3.0	4 1.3	6 2.0	58 19.5
	公務員	25 8.4	10 3.4	6 2.0	1 0.3	—	—	8 2.7
	会社員	50 16.8	19 6.4	22 7.4	2 0.7	—	1 0.3	6 2.0
	団体職員	27 9.1	10 3.4	12 4.0	1 0.3	—	—	4 1.3
	酪農業	111 37.4	54 18.2	35 11.8	1 0.3	3 1.0	3 1.0	15 5.1
	漁業	33 11.1	13 4.4	7 2.4	2 0.7	—	—	11 3.7
	建築・建設業	6 2.0	4 1.3	1 0.3	—	—	—	1 0.3
	サービス業	1 0.3	—	1 0.3	—	—	—	—
	自営業	25 8.4	6 2.0	9 3.0	1 0.3	—	1 0.3	8 2.7
	パート・アルバイト	8 2.7	2 0.7	3 1.0	—	1 0.3	—	2 0.7
	その他	11 3.7	3 1.0	3 1.9	1 0.3	—	1 0.3	3 1.0
希望する高校	合　計	297 100.0	119 40.9	94 32.3	9 3.1	4 1.4	6 2.1	59 20.3
	別海普通科	160 55.0	65 22.3	49 16.8	8 2.7	4 1.4	4 1.4	30 10.3
	別海酪農科	39 13.4	22 7.6	10 3.4	—	—	1 0.3	6 2.1
	中標津	34 11.7	10 3.4	14 4.8	1 0.3	—	—	9 3.1
	標津	2 0.7	1 0.3	—	—	—	—	1 0.3
	羅臼	—	—	—	—	—	—	—
	中標津農業	2 0.7	—	2 0.7	—	—	—	—
	根室	—	—	—	—	—	—	—
	根室西	—	—	—	—	—	—	—
	標茶	3 1.0	1 0.3	2 0.7	—	—	—	—
	標茶を除く釧路管内	14 4.8	5 1.7	7 2.4	—	—	—	2 0.7
	根室釧路管内以外	9 3.1	2 0.7	5 1.7	—	—	—	2 0.7
	未定	28 9.6	13 4.5	5 1.7	—	—	1 0.3	9 3.1

資料出所：筆者の調査結果から作成した。

別海町は，将来ともに，水田地帯や畑作地帯にはなり得ない訳ですから，将来ともに，酪農で生きていくしかない。ということになると，その担い手をこれからも別海高校，とりわけ酪農科に期待しているということになります。このことは私だけではなくて，ウチ（別海町の意 ── 引用者注）の町議会の皆さんも，別海高校にこういう支援をしたいというと，反対する人は誰もいません。ということは，そういう役割を町民全体がきちんと分かっているからだと思うのです。そのことを認識しているのです。

だから，これからもその役割を果たしていかなければいけない。そのためには，酪農科を無くしてはいけないと思っています。定時制でだめなら，全日制にしてもいいから，絶対に酪農科は無くしてはならないと思っています。── 2005（平成 17）年 3 月 16 日のインタビュー調査から

したがって，ここでのアンケート結果は，別海町における中学生の保護者という限定された範囲内の人々の声であることは確かだが，しかし，いまみた佐野力三氏のインタビュー調査の結果からも明らかなように，ここで示された「酪農科の存続」を望む声は，広く別海町の住民としての「声」でもあるといえよう。それはまた，これまでの別海高校酪農科が別海町という地域社会に果たしてきた役割を十分認識していることの表れであるとともに，今後の別海高校酪農科によせた大きな期待の表れでもあるとみてよいだろう。

Ⅳ．純農村部に立地する小規模農業高校・学科の存立意義 ── 結論

以上の結果から結論を述べると，純農村部という，都市部からも遠く離れ，産業構造においても農業に大きく依存した地域を存立基盤にしている小規模農業高校・学科にとっての存立意義は，第 1 に，地域の子ども・青年・保護者（住民）の実態に即して，学校が組織化・共同化された，いわゆる「地域の高校」として存在し，第 2 に，その存立基盤ともなっている農村地域社会に対して，どのような役割を果たすことができるのかということを強く自覚することであり，第 3 に，その役割が地域農業の担い手をどのように育て，育んでいくべきかといった人材育成，すなわち，「農業後継者の教育」にあるならば，それが地域農業の実際と結び付いて，豊かに，実践・展開されていかなければならないという極めて単純なことである。

このことは，地域課題をしっかりと見極め，それに対して自覚的になることが重要であるとともに，農業への依存度が高い純農村部にとって，農村地域社会の担い手としての人材を育成するという「農業後継者の教育」は，依然としてその必要性があるということを意味している。

しかしながら，これまでの多くの農業高校において，そこには，様々な社会的な背景があったことも事実だが，農業後継者の養成を目的にした教育から，生徒の人間発達・人格形成が強調された教育へと農業高校教育の質的転換が図られたことをみても明らかなように，現在の農業高校・農業学科にとって，内実の伴った「農業後継者の教育」を実践・展開するということは，それほど単純，かつ簡単なことではない。

また，北海道東部の別海町という，酪農が町の基幹産業であると同時に，その酪農に大きく依存した地域で生活する子ども・青年，とりわけそのうちの〝農業後継者〟とされる高校生・中学生一人ひとりの意識と実態の側面からいえば，この地域に生きる農業後継者の多くが，一方では，家や家族のことを思いながら，「家の手伝い」や「就農への不安」といった特有の困難

を抱えていることは本論でもみてきた通りである。このことは，全国一の経営規模と生産性を備えた大型酪農専業地域で観察された特殊な事例ともいえようが，しかし，日本中の〝純農村部〟においては，現代日本の「農業」そのものが，常に不安定な構造基盤に立脚して在している産業であることに加えて，それがその地域性によって大きく左右されるものだけに，一般的な問題として容易には浮上してこない(その地域にしかみられない)，似たようなケースが少なからず存在しているのではないだろうか。そしてまた，この問題の核心に対して留意しなければならないことは，それを担う〝農業後継者〟はある種のマイノリティでもあるといえるのではないか，ということである。

そこで，改めて，農業高校教育の在り方と今後の方向，理念を再考することが強く求められている。すなわち，それは，本研究において明らかにされた，別海高校酪農科の地域社会に果たした役割という実践や別海町に生きる農業後継者が直面している現実のそれぞれが示したように，「農業後継者の教育」を，「地域社会を支えていくための必要不可欠なもの」として正当に評価するとともに，その農業後継者を守り，育むための教育を農業高校教育全体のなかに正しく定置するということである。別言すれば，かつての農業高校が，その存立基盤にもなっていた農村地域社会と密接な関わり合いを築いていたということを想起するなかで，その地域社会の教育要求を鋭く問い直し，同時に，地域社会の在り方をも創造するといった両面の機能が求められているということである。

このことは，一般的に，都市部に近い比較的規模の大きな農業高校，すなわち，「拠点校」とされる農業高校よりも，地方の農村部に立地している小規模農業高校・学科にこそ求められているものである。

したがって，これからの小規模農業高校・学科は，その視点を「高校にとっての地域」から「地域にとっての高校」という学校の主体性をより明確にしたものへとさらに深めながら，その存立基盤となっている農村地域社会の「形成・維持・発展」に対して，どのような役割を果たすことができるのかということを地域の教育課題・教育要求として積極的に引き取って，その課題解決に向けた小規模農業高校・学科ならではの「学校づくり」が指向されるべきである。つまり，このことこそが，今後の小規模農業高校・学科の展望を開く契機の１つになるとともに，小規模農業高校･学科が存続していくための〝力強い〟条件にも繋がると考えるのである。

[注]

1）高校数やその配置および学科の設置等を改めて見直すことを意味する用語として，「高校再編成」という言葉も散見するが，本稿では，学科改編ならびに学校統廃合を合わせ含めて「高校再編」という用語に統一して記述する．

2）「高等学校設置基準」第五条によれば，高校の学科は，「一．普通教育を主とする学科，二．専門教育を主とする学科，三．普通教育及び専門教育を選択履修を旨として総合的に施す学科」に大別されている．このうち，専門教育を主とする学科には，農業に関する学科，水産に関する学科，工業に関する学科，商業に関する学科などが含まれるが（第六条），それらの学科の置かれ方には，単独で置かれる場合（単独制）と普通科等の他学科と併設される場合（総合制）とがある．「農業高校」といった場合には，前者を指すことが一般的であるが，後者においても「農業高校」であることに変わりはない．したがって，本稿においても，その文脈において，「農業学科」が強調される必要のある時には，「農業高校・農業学科」と記すことにする．その際，「農業学科」は「農業に関する学科」を意味するものである．

3）さしあたり，「農高存続の危機　統廃合が加速」日本農業新聞，2004 年 1 月 22 日，(1)(19)．「道内農高『定

員割れ』8割　このままだと統合のピンチも」日本農業新聞，2004年2月3日，（ほっかいどう面）等を参照されたい．

4）例えば，このことに関して西尾栄次は，「その基底は同じにしながらも，二次的機能(社会的，文化的機能)へ重点を傾斜し，しかも，そこに農業高校のレーゾンデートルを求めようとする傾向が強くなった」と述べている．以上，「農業高校教育の再構築を」，富民協会，『農業と経済』，45(1)，1979年1月，77-78頁．

5）農政ジャーナリストの会編『問われる農業教育』，農林統計協会，1979年．農林水産省図書館編『農業教育問題』，農林統計協会，1987年．神谷慶治監『農業教育の課題』，信山社，1989年．日本農業研究所編『日本農業教育の再構築の課題』，日本農業研究所，1999年等にそれぞれ詳しい．

6）いわゆる「田中構想」といわれる（当時の文部政務次官であった田中啓一による）もので，農業高校の「パイロットスクール」として，一都道府県に2校程度を設置する計画であったという．具体的には，1963（昭和38）年に，中央産業教育審議会から「高等学校における農業自営者養成及び確保のための農業教育の改善方策について」の建議を受けて，翌1964（昭和39）年度に創設された．

その主な内容は，学校農場の拡大，大型農業機械の導入，家畜の多頭羽飼育および全寮制（1年ないしは2年間）とするもので，その後，全国において38校がこの指定を受けた．

7）浜田陽太郎『近代日本農民教育の系譜』，東洋館出版社，1973年，41頁．

8）川俣茂『農業後継者の教育』，筑波書房，1979年，152頁．

9）総務庁行政監察局『産業教育の現状と問題点』，大蔵省印刷局，1991年，3頁．

10）詳しくは，田島重雄編『北海道農業教育発達史』，日本経済評論社，1980年を参照されたい．

11）詳しくは，『戦後高校農業教育の展開再編過程と地域に関する実証的研究』，文部省科学研究費補助金総合研究（A），1985年および「地域農業の発展と農業高校　三浦半島の事例から」，アジア地域農業教育研究会，『昭和60年度アジア地域農業教育開発計画研究開発委嘱事業報告書』，筑波大学農林技術センター，1986年を参照されたい．

12）小出達夫「教育の社会的編成と公共性 ── 事例研究・北海道士幌高等学校 ──」，北海道大学教育学部付属産業教育計画研究施設，『産業と教育』第12号，1994年．

13）横井敏郎「高校と地域社会の教育的ネットワーク論 ── 北海道町立農業高校の存立基盤」，北海道大学高等教育機能開発総合センター，『生涯学習計画研究年報』第2号，1996年．

14）農林水産省『農林業センサス』および『農業構造動態調査』の各年版による．

15）中野哲二『農業教育の現状とその考察 ── 南西地域における農業後継者教育を中心として ──』，高文堂出版社，1989年，206頁．

16）農村開発企画委員会『青年農業者の確保と農村空間の新たな創造』，農林統計協会，1996年，2頁．

17）農政調査委員会編『農業統計用語辞典』，農文協，1981年8月20日（第3刷）．

18）農林水産省ホームページ（http://www.maff.go.jp/soshiki/kambou/kikaku/seishin/160315_dai11.pdf），2005年9月1日取得，33頁．

19）それは，農業高校を卒業した農業自営者に対し，自宅において営農を継続させながら，経営や生活上の適切な指導を行い，的確な判断力と高度の経営能力を身につけた農業者の養成を図るために，農業高校に設置された継続教育機関である．

現在，別海高校以外に，農業特別専攻科を設置する高校は，全国で，北海道富良野緑峰高校，北海道士幌高校，岩手県立盛岡農業高校，山形県立庄内農業高校，栃木県立宇都宮白楊高校，千葉県立茂原農業高校，富山県立中央農業高校，福岡県立福岡農業高校のみとなっている．

20）2005（平成17）年2月22日，米田敏也氏（別海高校酪農科教頭 ── 当時）のインタビュー調査による．

21）現在の定時制課程に関する方針は，「ア　1学級の定時制にあっては，5月1日現在の第1学年の在籍者が2年連続して10人未満となり，その後も生徒数の増が見込まれない場合は，統廃合を行うこととする」および「イ　職業学科の定時制で，複数の学科が設置されている場合については，全体の在籍状況を勘案し，学科の再編を含め学級数の調整を検討する」とされている．つまり，定時制課程の取り扱いは，全日制課程とは区別されて考えられている．以上，北海道教育委員会「公立高等学校配置の基本指針と見通し」，2000年6月，7頁．

22）米田敏也氏，前掲インタビュー調査による．

23）さらに，別海高校自体は統廃合されるわけではないことに加えて，酪農科が昼間定時制として 3 年間で卒業できる形態であることと学校農場を持たないことがこの議論をより複雑なものにしている．

24）別海町百年史編さん委員会『別海町百年史』，別海町，1978 年，1108 頁．

25）「酪農及び肉用牛生産の振興に関する法律」，1954（昭和 29）年 6 月 14 日法律第 182 号，第 1 章総則／（目的）第 1 条．

26）また，この事業に対する評価も，根釧パイロットファーム事業の場合と同様に，正否の分かれるところとされている．すなわち，それは，「新酪農村建設事業に関しては，その評価は現在に至って毀誉褒貶相半ばするところであるが，別海酪農の発展に大いに寄与したことは誰しもが認めるところであろう」（傍点引用者）と述べられている通りである．以上，別海農業協同組合『風雪の半世紀史 ── 未来への翔き ──』，別海農業協同組合，2000 年，132 頁．

27）「道立農試が考える北海道農業・農村ビジョン」検討委員会編「農業統計を用いた北海道農業・農村の現状分析と将来予測」，『重点研究課題の中間評価』，北海道立中央農業試験場，2003 年，（北海道立農業試験場資料 32 号）．

28）別海農協史編纂室『別海農協史』，別海農業協同組合，1975 年，404 頁．

29）同上，同頁．

30）「卒業者数」，創立二十周年記念事業協賛会記念誌編集部，『創立二十周年記念誌』，北海道別海酪農高等学校，1972 年，178 頁．

31）高垣泰彦「学科転換のいきさつ」，創立二十周年記念事業協賛会記念誌編集部，前掲書，74 頁．

32）同上「祝辞」，北海道別海高等学校創立三十周年記念協賛会編集部，『別高三十年史』，北海道別海高等学校創立三十周年記念協賛会，1980 年，4 頁．

33）根室酪農史刊行会『牛郡雲の如し ── 根室酪農の歩み』，雪印乳業株式会社，1975 年，366 頁．

34）同上，同頁．

35）別海町百年史編さん委員会，前掲書，787 頁．

36）同上，同頁．

37）現在，北海道における農業自営者養成校の指定を受けている高校は，名寄農業高校（指定昭和 41 年），岩見沢農業高校（同 43 年），大野農業高校（同 44 年），帯広農業高校（同 48 年）の 4 校（いずれもＢ型）となっている．

尚，類型のＡ型・Ｂ型の違いは，生徒の入寮生活において，前者が 2 年，後者が 1 年ということによるものである．

38）2005（平成 17）年 2 月 22 日，漆原剛氏（別海高校酪農科教諭）のインタビュー調査による．

39）例えば，当該地域の気象条件についてみると，年平均気温は 5 ～ 6 ℃と冷涼であり，降雨量は 1,000～1,200 mm であるが，5 月から 10 月にかけて多く，農作物生育期間の積算温度は 2,000℃程度と極めて低い．さらに，冬期間の積雪は少ないが，土壌凍結はその深さが 30～50 cm にも及ぶという．また，土地条件に関して，別海町に広く分布している摩周系火山灰（性）土壌は，その特異な性状としてリン酸吸収係数の高いことで知られ，かつては，北海道における三大特殊土壌の 1 つに数えられていたものである．

40）このホームプロジェクトは，厚沢留次郎によれば，「教師の指導と両親の協力のもとに，生徒が，わが家の農業の問題を選び，それを解決するための計画をたて，わが家で実践すること」（『農業科教育法』，農業図書株式会社，1976 年，151-152 頁）と定義されている．また，その起源は，1908（明治 41）年に，米国マサチューセッツ州のスミス農業学校の校長・スチムソン（Stimson, R. W）が，「学校で学んだことが実際の農業を行うのにあまり役に立たないという社会の非難に対して，それは実習の方法が悪いためであろうと，学校の教科で学んだことを家庭の農場で実際に適用し，たとえば 1 年間 1 群の家畜を飼育する」（松本重男著・久保田旺監修『プロジェクト学習の理論と実践』，筑波書房，1982 年，16-17 頁）といった方法を考え出したのが始まりとされている．

一方，このような，米国式ホームプロジェクトの日本への導入は，1948（昭和 23）年 5 月 10 日に，コロラド農工大学教授のカナダ（Canada, G. W）によって行われた講演が最初であるといわれ，その後，戦後の新制農業高校において急速に普及していった．ところが，1956（昭和 31）年の学習指導要領の改訂により，経験主義教育思想から系統主義教育思想への影響をうけて，学問体系を背景にした科目に方向転換がなされる

とともに，農業後継者の激減に伴う農業高校の質的転換が図られたこととも相俟って，その後の農業高校教育におけるプロジェクト学習は，スクールプロジェクトが主流となり，ホームプロジェクトはしだいに衰退していくことになった．

41）プロジェクト学習は，全ての農業高校･農業学科で実施されている．したがって，別海高校酪農科の場合，ホームプロジェクト以外の生徒は，スクールプロジェクトとして，その希望に応じて「加工班」「園芸班」「機械班」「生活班」の 4 専攻に分かれ，ホームプロジェクトと同じように月・金曜日に実施されている．

42）北海道別海高等学校定時制課程酪農科「平成 17 年度　学校教育計画」，36 頁．

43）同上，同頁．

44）全国農業高等学校長協会編『農業教育百年記念誌』，筑波書房，1983 年，14 頁．

45）川俣茂，前掲書，151 頁．

46）乾彰夫「進路選択とアイデンティティの形成 ──『分化を遅らせる』進路選択理念の再検討」，堀尾輝久・他編，『子どもの癒しと学校』，柏書房，1996 年．212 頁，（講座学校第 4 巻）．

47）さらに，このことについては，拙稿「別海高等学校農業特別専攻科に対する学生の評価とその周辺 ── 修了者のアンケート調査から自営者教育･後継者育成を考える ──」，北海道総合農学研究会，『北海道農業教育研究』，49(1)，2001 年，52-71 頁も参照されたい．

48）愛知県立渥美農業高等学校『農業自営者養成学科における農業の基礎的な技術と経営能力を育成するための教育内容及び指導方法に関する研究』，1977 年，18 頁および 81 頁．

49）職業教育の活性化方策に関する調査研究会議，1995（平成 7 ）年 3 月 8 日．

50）理科教育及び産業教育審議会，1998（平成 10）年 7 月 23 日．

51）ここでは，その「専門的な学習」とは何か，ということに対して深く立ち入る余裕はないが，それへの手懸かりとしてひとまずいえるのは，高い就農意欲と就農後の強い営農意欲を持ち得るような動機を育み，それを引き出すことであろう．このことは，高度で最先端といわれるような営農技術のみを追求する，皮相的で奥行きのない，いわゆる〝how-to〟の学習では決してあるまい．

［付記］

本稿は，筆者の修士論文「純農村部に立地する小規模農業高校・学科の存立に関する実証的研究 ── 北海道別海高等学校定時制課程酪農科の存続問題を素材として ──」（平成 17 年 12 月提出）を大幅に圧縮縮小した後，若干の加筆修正をしたものである。